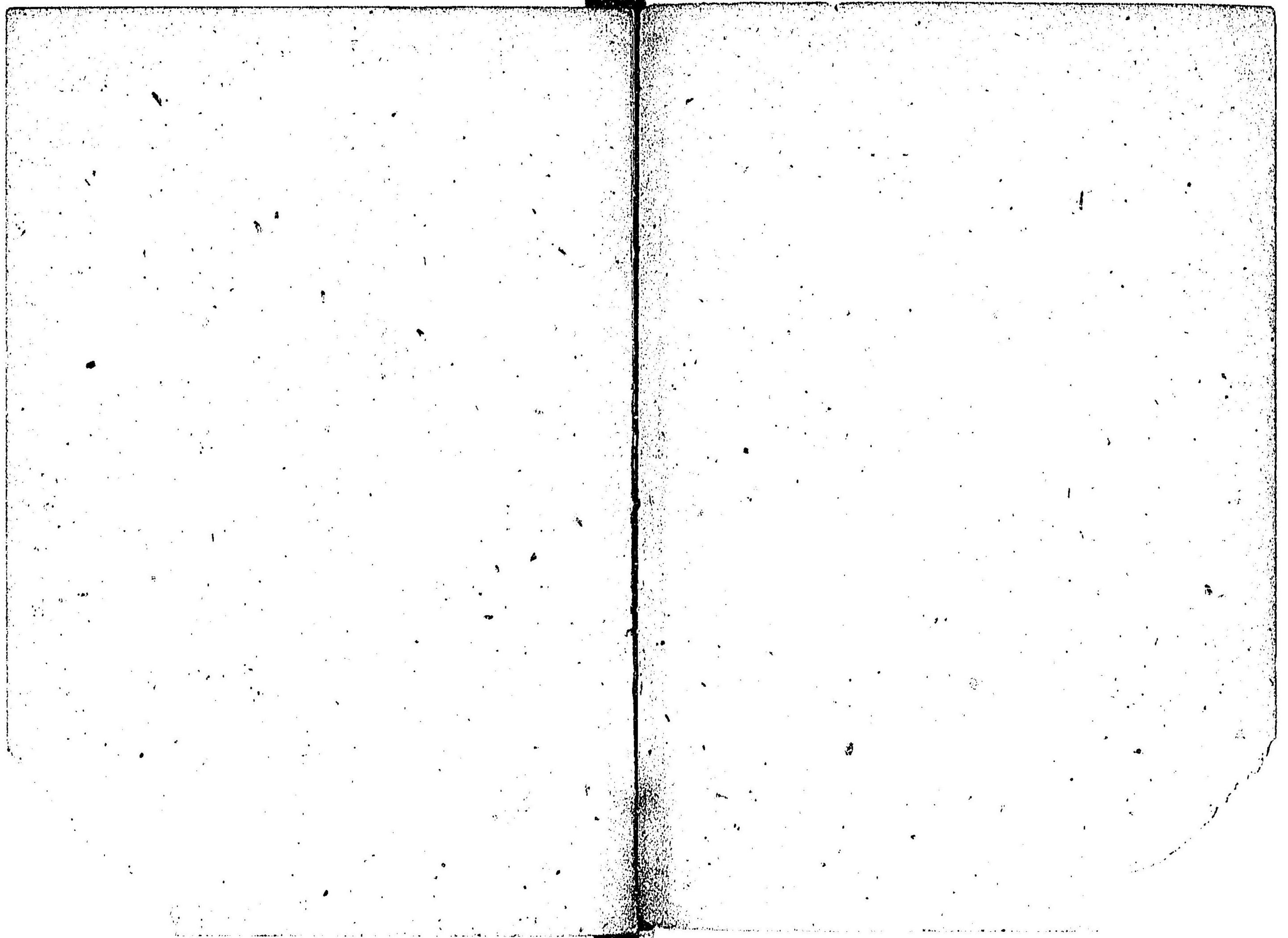


318

22

解疑

第二篇





佛人ドゥワールドレゼー演説
日本 林 壽太郎 筆記



解疑

第二篇

解疑第二篇目次

○人間に就ての難目

第一 道德に就て

- (一) 神の如き視えざるものに對して何の義務あるや……………一頁
- (二) 全能なる造物主の作たる人間に缺點あるは何ぞ……………三頁
- (三) 吾人が有形的行爲に對して無形的賞罰あるは不道理ならずや……………五頁
- (四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず……………八頁
- (五) 善惡とは人間の都合上區分したる名なり……………一五頁
- (六) 善惡の賞罰は行に因らず心に因るなり、然らば吾人は實際の善惡を知るの要なし……………一八頁

第二 自由に就て

- (七) 神が吾人に自由を賦へたるは善惡共に吾人の勝手に任すの意なり……………二〇頁

(八) 天國は人間の價値を一段低くする所あり、何と云れば死后天國に往けば善のみに固まりて自由の能力を失ふといへばなり……………二二頁

第三 人性に就て

(九) 始めあるものは終り無るべからず、然るに靈魂は始めあつて終りなしといふ不道理あり……………二四頁
(十) 禽獸にも亦た無形的動作あり故に靈魂ありといふべし……………二六頁
(二) 無形なる靈魂が有形なる肉体に繼かるゝといふ理は解する能はず……………三〇頁
(三) 實驗學上人体に就ては物質の他別に靈なるものを認めず……………三四頁
(三) 人間は物質固有の力に因て成立つものなり……………三七頁
(四) 精神作用は頭腦の組織より生ず……………四〇頁
(五) 生命は物質固有の力に作用に他ならず……………四七頁

第四 人祖に就て

(六) 人類は下等動物より進化したるものなり……………五四頁
(七) 人類の別あるは一元祖ならざる證なり……………六四頁

(元) 人類に皮膚の色の差を生じたるは何故ぞ……………六九頁
(元) 毛髮、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ……………七三頁
(辛) 人類の地上に發現したるは數万年前……………七七頁
(三) 原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは動物より進化したりといふ方眞に近し……………八四頁

第五 原罪に就て

(三) 世界萬物原罪に漬れたりといふは信じ難し……………九一頁
(三) 原罪の如き自己の闕知せざる罪に因て罰さるゝは非理も甚し……………九六頁
(三) 何故神は漬れたる人間を改造せざりしや……………一〇一頁
(三) 何故神は兒戯に類する掟を以て人祖を試みしや……………一〇二頁
(六) 靈魂は各自神より賦へらるゝいふ然らば原罪に漬らるゝ所以なし……………一〇四頁

第六 未來に就て

(七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を視ず……………一〇六頁

(元) 未來の賞罰を目的とする道徳は下等なり……………一一二頁

第七 天國に就て

(元) 神を知らざるも善行を爲すものは助りを得べきなり……………一一三頁

(二) 天國に在る靈魂が地獄の苦罰を視て其福樂を傷けざるや……………一一六頁

(三) 肉体の感覺を離れて何を樂むや……………一一八頁

第八 地獄に就て

(三) 人間が世の終りに復活するといふは學理に背く……………一二二頁

(三) 善美なる造物主の在す宇宙間に地獄の在るといふは信するに足らず……………一二三頁

(三) 無限の憐ある神が無限の苦みを與ふるとは撞着ならずや……………一二五頁

(三) 限りある罪を罰するに限り無き苦を以てするは過酷あり……………一二六頁

以上

解疑第一篇目次終

解疑第一篇

佛人 ドルワル、ド、レゼー 口述

日本 林 壽 太郎 筆記

(一) 或問、吾々人間は己に近い親族に對してこそ義務もあるが、神の如き視ることも出来ぬものには對して何で盡すべき義務があるか。

解答、存在せぬものには對しては義務が無いといふは勿論である、無いものに何の關係があるべき、是は云ふまでもないことだ、右の難問は横着に云ひ廻したもので其實神の如き視ぬものは存在せぬといふ旨意に歸着する、依てこれは神が有るか無いかといふことを明かにすれば自ら解る問題である、先づ神は視ぬから無いといはれようか、總て視ぬものは無いといふならば、靈魂も、眞理も、道徳も、一層下つては物質界の電氣も磁力も力もエーテルも皆悉く見えぬから無いといはなければならぬ、然し問者といへども是等のも

(二) 神の如き視ざるものに對して何の義務あるや

(一) 神の如き観えざるものに對して何の義務あるや

のは肉眼に視えずとも、其結果其作用其現象が視えるから無いとは云はき
だらう、然らば何故神はないといふか、神も矢張其結果其大なる働作などが
明かに見えるではないか、又問者が神は解らないから信じられないといふ奇
らば同じく總ての解らない現象は信じられないといはなければならぬではな
いか、問者よ或博識が斯ういふた『世界萬有は大なる玄義である』と、實に
其通り吾人に明かに解つたことは數學幾何學の如き一部の學問の他一もない
のである、化合力に因て燃焼を起すとか、男性女性の交接に因て生を殖やす
とか、一見死物と異らぬ種が植物に成るとか、肉や米を食すれば血液に變ず
るとか其血液が肉体の部分に因て筋肉となり骨となり皮膚となり、毛髮とな
るとか、地球が、求心遠心二力の作用に因て太陽の周圍に運轉するとかいふ
が如きは其何故なるかを明細に解つた學者が一人でもあるか、是等の現象が
有ることは疑ひない、けれども其理由は小しも解らぬではないか、されば解
らぬから信じられぬといふは愚な話である、

猶又神は問者のいふが如く全く解らぬものあるか、信じられぬほど少しも解
らぬかといふに決してさうでない、神は無邊であるから其性質を全く曉ると
いふことは有限なる人智の及ぶ所でない、けれども隨分解つた所即神は如
何なるものか、其多くの徳、其聖慮、其望などは略解ることが出来た、近く
曰へば神と人との關係、權利、義務などは隨分解つて居る、神の御心に適ふ
やうに身を修めることが出来る丈に解つた、此故に吾人は何うしても神に對
して大なる義務があるのだ、眞實にいへば神が有らせられるといふ證據は澤
山あるが神が無いといふ證據は一もない、神の有るといふ定論は疑ひない
ものは無いのである、故に吾人は問者に對して反問する、神の如く疑ひを起
すことの出来ぬほど明かに其有ることを知られるものに對して、何うして義
務が無いといひ得るかぞ。

(二) 或問、全能なる造物主の御作に缺點があつてはならぬ、然るに萬物の長なる人間に
大なる缺點あるは何故なるか。

(三) 全能なる造物主の作たる人間に缺點あるは何ぞ

(三) 全能なる造物主の作たる人間に缺點あるは何ぞ

四

解答、半熟先生は兎角輒く定論するが、却て論証はせぬ勝である、吾人は断じて答

へる造物主の御作でも缺點は何うしても無ければならんと、何せあれば無邊絶對なる造物主の他、悉く有限待對物のみである、而て有限或は待對といふは不完全である缺點物であるといふ意味だからである、

吾々人間はいふまでもなく始めあるもので、各何十年前に生れたものである、故に時間に就て缺點物である、時間に就て缺點のないのは始めないに同じだから被造物には有り得べからざることである、總ての點に就て皆同じだ、身長も体力も働作も皆其上に増すことの出来るものである、五尺の身長あるものも六尺のものより低い、十五貫目の物を負ふ人も三十貫目の荷を負ふ馬よりも力が不足だ、何に就ても皆其通りで、不足缺點のあるのが有限物の性質であるのだ、

ソコで人間の缺點中其性質に因て有る缺點も多いが、而し罪より出る缺點も亦た少くない、此罪より出る缺點は何であるかといふに即道徳なる罰であ

る、所で性質より来る缺點は決して直すことは出来ないが、罪より来る缺點即罰は造物主の大なる憐れを以て立てられたる道に従て直すことが出来る、委しくいへば今世に於て少くすることが出来、來世に於て全く無くすることが出来る、是が天主教の目的である。

(三) 或問

靈魂は無形的の働を爲し肉体は有形的の働を爲して各其働が違つて居る、故に其責任も各別でなければならぬ、有形的働作の爲に無形的應報のるは不道理でないか。

解答

是は人間の性質に關係する難問だから解り難い、世界萬物中人間様奇いもの意味深いものは無いから人間の性質に關しては解らぬことが頗る多い、先人間といふものは二つの反對なるものゝ結合に因て成立つものである、即無形なる靈魂と有形なる肉体との合体したものである、而て物の働は其性質に適合するものだから靈魂には無形的の働、肉体には有形的働があるのである、が然し此二つの働は一は靈魂ばかりに、一は肉体ばかりに關して居

(三) 吾人が有形的行為に對して無形的賞罰あるは不道理ならずや

五

(三) 吾人が有形的行為に對して無形的賞罰あるは不道理ならずや
 六
 るとはいはれぬ、如何なる働も兩方の働 即人間の働といはねばならぬ、
 何せなれば靈魂と肉体の結合は單に合同したとか混合したとかいふことでは
 無いからである、例へば今手を合せても兩手は一本のものにならぬ、水の中
 に砂糖或は食鹽を混ぜても別な一種のものにあつたといふ譯ではない、矢張
 砂糖は砂糖水は水で別々に居ることは恰度大豆の中に小豆を混ぜたのと少し
 も違つたことはない、靈魂と肉体の結合は如斯きものではなく合体して一の
 新たなものと成つたので最早靈魂でも肉体でもあつたものである、其新たな
 るもの即是人間である、靈魂のみでは人間でなく肉体のみでも人間でない、
 二つの結合に因て人間に成るのである、然しながら此不思議なる結合は如何
 にして成り得るかといふことは少しも分らぬ、唯確かにさうだと知るのであ
 る、のみならず現に視るのである、若し論者が左様に不思議な結合は理解ぬ
 から信じられないといふならば、物質にも同様な結合があるから矢張信じら
 れないと云はねばならぬ、例へば右に舉げた砂糖と水の合併はこれは不完全

な合併であつて其實混つたのである、けれども酸素と水素といふ二つの氣體
 が合併すれば酸素でも水素でも無い別な新物に成る、即流体なる水と成る、
 これが完全の結合である、又曹胃膜といふ金屬と格魯兒といふ氣體とが抱合
 して食鹽といふ全く別な物に成る、これ亦た常の合併でも混合でもない、完
 全な合併眞の結合である、此不思議なる結合は何で出来るかといへば、化學
 者は之を化合力の作用であると答へる、然らば化合力とは何かといふたなら
 ば、最早少しも解らぬと答へるの他ない、けれども慥かにさうであることは
 現に視る所である、靈魂と肉体との二つが結合して新たな人間と成るとい
 ふも矢張右の物質の不思議なる結合と幾んど同様なるものである、尤も形而上
 の事を論ずるに形而下の比喩を以てするのは全く適當しては居らぬ、故に其
 結合は同じ様だといふの他ないのである、
 ソ、で右物質の結合 即元素の化合といふことは理解ぬほど不思議でも之を
 信じながら、何うして形而上のことに至ては之を信じないか、是は餘りに勝

(四) 社会は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係も有せず
 手な話ではないか、既に斯く靈魂と肉体の結合に因て人間といふものになる
 成るならば、靈魂の働きも肉体の働きも其物のみに關するのでなく人間に關
 するのであるといふことは何よりも明かなことである、それを哲學上のみな
 らず法律にも陸海軍にも學校にも會社にも官衙にも總て社会は此結論に従つ
 て相互の交際を爲し善惡に報ひて居るのである。

(四) 或問、スベンセル曰く『社会法は萬有法と同一理法なり』と、シヨツペンホーエル
 曰く『社会は物質界と全く同じく道德に何の關係を有せず』と、此二先生の
 いふ所に従へば究極靈魂とか道德とかいふことも實際にあるものではない。

解答、日本今日の状態を觀れば概してスベンセルやシヨツペンホーエルを大學者大
 博識であると崇拜して是等の人の筆に成る説ならば二も二もなく直に取つて
 之を飲み之に酔ふといふやうである、さりながら西洋に於ては左様に極く學
 者の尊稱を呈せぬのである、人々は又た其論其説を聽いて先づ之を飲み前
 に果して之が眞理實驗に合ふか否やといふことに就て充分の吟味を遂げるの

である、獨逸國の最も高名なる學者ニエツチがいふに『シヨツペンホーエルの
 社会學説は世界万物を器械視する愚見である』と、實に其通りで若しも社
 會法と万有法と同一であるといふならば、極端にいへば自由の權利と電氣磁
 氣とが同一の力であるといはねばならぬ、善を好み惡を嫌ふこと、國土を
 一朝に破滅するの地震といふ現象とは同一であるといはねばならぬ、忠、孝、
 愛國と風雨とは一般であるといはねばならぬ、倫理道德を教える學校と測候
 所とは同一であるといはねばならぬ、文學審美學と酸素水素の化合して水と
 成ると同じだといはねばならぬ、論者の中斯る結論に服するものがあらう
 か、決して有るまい、若し万一にも有るならば實に憐むに堪へたる愚人では
 ないか、
 社会が物質世界と全く同一にして道德に何等の關係も有たぬといふシヨツペ
 ンホーエルの説は畢竟スベンセルの説と同じ意味である、即社会法と万有
 法と同じであるならば社会に於ける智慧も自由も善惡も道德も無いもので、

(四) 社会は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず

(四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず 十

物質が堅く極つた規則に支配されて働くが如く社會も支配されて働くものといはねばならぬ、嗚呼斯くまでの虚妄を以て書に著すは社會に侮辱を與へる學者があるといふは實に驚かざらんと欲するも得べからずである、眼を開いて社會を視れば昔といはず今といはず、世界万民が道德てふことはを鑿意したことは無いではないか、社會の實際は全く彼シヨッペンホーエルの説に反對の証據を示して居るのではないか、

昔はプラトン、ソクラテス、アリストット、シセロンなどは社會に對して何を教えたか、専ら道德であるではないか、支那の孔孟は何を説いたか、是亦た同じく仁義道德ではないか、彼等の書中或は誤謬の個所が少くはない、然しながら彼等が道德に就て如何程心配したかといふことは明かである、彼の傲然たるシヨッペンホーエルは三尺の童子も眼を晒したる彼等の著書を讀まなんだのであらうか、

近く現今の日本を以て視るも、道德に就て如何に多く心配するかは明かであ

る、総ての新聞雜誌を看よ、日として道德に關する記事論説の掲げあらざることは無いと思はれるほどではないか、其他又道德に關する諸種の會、諸種の演説は年内何度ある所に開かれるであらうか、又彼の福澤氏といひ井上氏といひ西村氏といひ誰といひ彼といひ道德問題に就て大に力を盡し心配せられたる諸先生は實に指を屈するに迫るいはどである、猶又世界の廣き法律の無い國が一つでもあらうか、而て法律とは道德上社會に關係することを規定した所の法ではないか、又世界に警察、司法、監獄の無い邦があらうか、而て是又法律を以て規定られたる道德的義務を守らしめ若くは背きたるものを所罰するの機關では無いか、又世界に教育の無い國があらうか、而て教育の中に德育を加へざる國は一つも無いではないか、社會の状態を観察するに就て吾人が盲目であるか將たシヨッペンホーエルが盲目であるか、問者よシヨッペンホーエルの如き愚説を信するより卿が天より賦へられたる二個の眼を信せよ、其方が何れはを確かなるや知れまい、

(四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず 十一

(四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず 十二

尙又論を進めて一層廣く考ふるに道德といふことは實際は秩序といふことだ、即物の性質に従つて動くといふに同じである、道德を社會上から解決ば人と人との關係即權利と義務を講究するの學問である、委くいへば父子の關係、政府臣民の關係、主僕の關係及各自の身体、財産、商業等に就ての相互の關係等は社會の秩序であつて、之を講究するものが道德であるのだ、之に依つて見るとシヨッペンホーエルの論は社會の秩序を紊亂し社會を根柢から打ち毀して凡ての機利義務を亡するから、彼の恐るべき社會黨、虛無黨の如きものを誘發して社會を大混亂に導くものといはなければならぬ、問者は斯の如くなるも何能く彼が如き論を賛成するか、世界の舊歴史新歴史を研究すれば全くシヨッペンホーエルのいふ所に反して道德は社會に必要にして心配しなればならぬものは無いといふことを示して居る、文學家ブルンチエル氏はいふ『社會的論議は道德的論議に他ならず』と、バランツ氏はいふ『社會學と道德學とは甚だ密接して分離し難し、如何となれば社會學は個人

(四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず 十三

的行爲と國家との關係を研究する學問なればなり』と、ド、グルモン氏はいふ『人の總ての行爲は其人の智識と意志に發せざるはなし、故に社會の歴史は唯人の自由權と責任とを述べたる學問なり』と、此に於て吾人は結論する、社會法と萬有法とは決して同一でない、全く異なる性質のものである、而て萬有法は有形界のみに關するの法で下等に屬し、社會法は智識界のみに關するの法で上等に屬する、尙又社會は道德を要せずといふ説は甚しい虚妄である、却て社會は道德を最も必要とするものである、由來道德に就て心配するは人性である、人間は智慧と意志とを具へて居る、故に其智慧と意志の働き方を不問に置くことは決して出来ないものである、然して智慧と意志の正當なる働が即是道德である、斯く道德に就て心配するのが人性だといふのは道德が實際に有るといふ確な証據である、又斯く道德に就て大に論じたり、研究したり、生來に因て道德を好み不道德を嫌ふなどのことがあるは、智慧と意志を具へたる靈魂のあるといふ證據である、

(四) 社會は物質法に支配せらるゝのみ道德の如き何等の關係を有せず 十四

尙終りに當て道德に無頓着なることに就て面白い話を述べやふ、其は即ち無宗教家無神論者までが道德上の論議を好むといふことだ、殊に最も妙なるは社會が無宗教に傾くに隨つて益道德論が隆にあるといふことである、往昔羅馬に於て道德論の最も喧かつた時代は其國の最も腐敗した時であつた、今世紀に於て新聞に雑誌に著書に演説に道德論の亞細亞洲中一番隆に行はれる國は疑なく一番宗教に冷淡無頓着な國である、一寸考へると是は不思議な現象と思はれる、が然し決して奇とするに足らない、人間といふものは其行が不道德に成るに従つて却て表面に道德を飾るといふが人情である、それでも口に筆に頻りに道德を論じ立てるのである、且又人間は彼のスペンセル、シロペン、ホーエルの如く道德は實際に無いと主張しても己の子は不道德家に仕たく無い、正しい人間に成ることを望む、故に右の先生方も己の子の教育をば決して不品行な先生に委ねない、けれども若しも道德が人間の想像で實際に無いならばソナナ餘計な心配は要らない筈である、無駄な心配である、

(五) 或問、

是れ彼先生等の口と筆とは心と違ふといふ明かな證ではないか。
善惡といふことは人間の名を附けたので本來あるものでない、故に人に由り國に由て差ふのである、されば吾人は多數の人が善と思ふことを善とし、惡と思ふことを惡とすれば可い。

解答、

是は前段シロペン、ホーエルの稱へたる愚論と同じである、問者のいふが如く善惡は本來ないものだといふならば道德も矢張實際に無いといはなければならぬ、然しながら前にも陳べた通り、善とは物の性質より出る關係を守ることで、惡とは其關係に背くことである、例へば親子といふ上からの關係は兩方共に權利も義務もある、即親は其子に對して命する卒の權利があり、又養育する教育するといふ義務もある、子は其親に對して従ふ愛する孝行するなどの義務があり、又養育と教育を受ける權利もある、近く曰へば之が秩序であるのだ、處が秩序といふものは物質界に於ても立派に具つて居る、即物質は皆一定の規則に従つて居る、例へば地球が太陽の周圍に運轉する

(五) 善惡とは人間の都合上區分したる名なり 十五

(五) 善悪とは人間の都合上区分したる名なり

に、開闢の時から何億萬年の間一秒の違ひなく、春夏秋冬は年々歳々曆の示す通りである、其他風、雨、雪、河、海、草、木、禽、獸、皆悉く其性質に因て別々な規則に従て働いて居る、斯く智慧のない世界の爲に立派な秩序がありながら、獨り智慧の世界のみに何の秩序が無いといふは實に風顛病院に送らるべき人の考へたといふのも強ち過言でないと思ふ、而て此秩序とか、規則とか、或は物の性質及其性質より出る關係とかいふものは本來何であるかといふに、是皆造物主の全智に含むで在る思想である、さうして森羅萬象智慧のない世界も智慧のある世界も、造られたといふことは只造物主の此思想の表顯といふに過ぎないのである、之を以て本來善悪が無いものだといふのは究極造物主が無いといふに同じである、造物主が無いならば、世界は原因無き結果にして何でも皆偶然といふの他ない、然しながら毎度いふ如く偶然とは學問上何の意味をも有たぬ言で無智無學の輩のみ用ひる狂語である、

今より凡そ百年前から流行したる最も有害なることは、主觀と客觀の別を曖昧にするといふことである、眞偽にも、善悪にも、總て如何なる學問にも此主觀と客觀の別の無いものはない、ソコで客觀とは心外の實在をいひ、主觀とは心内の思想をいふのである、さうして主觀的思想が客觀的實在に合ふならば眞或は善である、若し合はないならば其思想は偽或は惡或は愚である、例へば太陽が地球の周圍に運轉すると思ふことが實際に合ふならば眞である、合はなければ偽である、處か天文学の証明する所に因れば太陽を中心として地球が太陽の周圍に運轉するのだといふ、シテ見と是は主觀的思想が客觀的實在に合はないので偽である、善悪も失張同じだ、實際の善といふは唯造物主の思想に合ふことのみである、人が如何程善と思ふても若しも其善とすることが造物主の思想に合はないならば其行は惡である、近く曰へば物の性質より出る秩序、即眞偽善惡は待對なる人間の智慧より出ない、只絶對なる造物主の智慧より出るのみである。

(五) 善惡とは人間の都合上区分したる名なり

(六) 善惡の賞罰は行に因らす心に因るなり、然らば吾人は實際の善惡を知るの要なし

(六) 或問、成程實際に善惡があらう、けれども吾人は己の心に善と思ふことを爲し惡と惟ふことを爲ぬならばそれで可い、何せなれば賞罰は己れの思ふ所に因て定められるものだからである。

解答、種々の難問に答へる爲には度々同じことを繰返さねばならぬ、之は誠に重復に渡つて煩はしい、けれども止むを得ぬことだから諒くも之を陳べるのである、前にもいふた通り眞偽善惡には主觀と客觀の別がある、故に主觀的に眞とする所も客觀的から見ても偽であるならば其は眞ではないのである、例へば右に擧げた地球中心説を如何は眞だと思ふても實際は太陽を中心として地球が運轉するのであるから客觀的から見ても偽である、さうして是等は只智識のみに関する事で、如何様に考へたればとて其主觀的思想が地球の運轉にも太陽にも影響するものでもなく又之が爲に潤を受けねばならぬといふこともなし、近くいへば是等は道德に關係ないことだ、それですらる人は智識の進歩

の爲に決して之を無頓着にせぬ、一生懸命に研究するではないか、然らば何故智識の進歩に関するのみならず其行爲に責任あつて賞罰を受けねばならぬといふ善惡に就ては客觀的に研究すること、即實際の善惡を知るの必要がないといふか、人が眞に善は爲すべく惡は爲すべからずと知るならば決して實際の善惡を顧みないなどいふことは出来ない筈である、されば右のやうな難問をする人は故意と本心を味ますものである、又問者は心に善とする所を行ひ惡とする所は行はぬといふが、實際吾人は只本心の指導にのみ依頼して安心して行へるか、何の標準も據もなく明かに細かに善惡を分別し得るか、たゞひ一定の或道或教を信せずとも時に依て若しも輿論とか、天道とか、佛とか、儒とかいふものを標準とするならば既に是れ本心のみの指導にわらざることは明かでないか、即其人は善惡の分別を客觀的に求めたものでないか、此に於て結論する、吾人は決して善惡の眞偽を主觀的に定むることは出来ない、何うしても之を客觀的に求めなければならぬと、

(六) 善惡の賞罰は行に因らす心に因るなり、然らば吾人は實際の善惡を知るの要なし

(七) 神が吾人に自由を賦へたるは善惡共に吾人の勝手に任すの意なり

二十

猶又吾人の本心は如何なる場合に於ての善惡をも疑ひなく明細に分別するといふことは決して出来ないものである、さうして其善とし惡とすることが幾分にも疑ひを存するに於ては決して真正の賞罰を左右することは出来ないのである、委しくは實際の惡事を己れが善事と思ふて行ふ場合に若しも幾分でも惡ではないかといふ疑ひがあつたならば其行は善でなくして之が爲に賞されることなく却て罰されなければならぬのである、此故に人は如何にしても真正の善惡を知らなければならぬ、即造物主の道徳を知つて之を守らなければならぬのである。

(七) 或問、造物主が人間に自由を賦へたのは善惡共に己れの撰む所に任せるといふ意味である、然らば吾人が善を爲し惡を爲すは其與へられたる自由を造物主の聖旨に従つて用ひたのである、之れが爲に其制裁に賞罰の差ひがあるは不道理ではないか。

解答、是は眞の理論でなく理窟である、本書第一篇の三十二より三十四に至る解答

を看たならば此難問は自ら打破されるであらう、故に茲には道理上のことは陳べずして二三の比喩を擧げやう、

陸海軍の兵卒は各武器を與へられる、然し其武器は戰爭の場合の他私に用ひられないは當然である、然るに若しも政府に叛する賊に従つて其武器を用ひたならば如何、政府に忠實なる行ひであらふか、

又茲に醫師が病を癒す爲に或者に毒藥を投じた、然るに彼は之を以て他人を毒害したならば如何、是亦た醫師の志に従つたといはれやうか、

又或は石を割る爲に監督者より爆裂藥を與へられた工夫が、己れの憎む人の家を破壊す爲に用ひたならば如何、是亦た同じく監督者の意に従つたといはれやうか、斯る類の比喩を擧げたならば際限ないが、兎に角斯やうなことを承知するほど愚かなものは狂人の他あるまい、吾人々間に自由を賦へられたのも是と同じて試験される爲である、善道を守る爲に全善なる造物主より賦へられた自由權を濫用して惡を犯したならば無論造物主に従ふとは云はれな

(七) 神が吾人に自由を賦へたるは善惡共に吾人の勝手に任すの意なり

二十一

(八) 天国は人間の價値を一段低くする所なり、何となれば死後天国に往けば善のみに固まりて自由の能力を失ふといへばなり

い、斯る淺薄な難問は殊更に辨ずるの要は無いが、往々教外者の口より出るのを聴いたから止むなく解答るのである。

(八) 或問、人は現世にある間、私慾や悪魔の誘惑などが有る、それで自由を用ゆる場合もある、然るに死後天国に往けば悪魔の誘惑もなく心は善に固まるといふ、是は恰も自由を失ふと同じである、シテ見ると人間の價値は死後一段下がるやうなものだ、

解答、此難問は高尚で意味が深いから、哲學的思想の無い人に對しては解答し難い、自由の原理を審にせぬ人の眼からは自由をば善惡其撰む所に任せるといふ意味に視るのである、けれども實はさうでない、自由の性質は相反すること或は相異なることの中に何れにせんと撰定する意志の能力である、ソコで惡といふことは物の性質より出るの關係、規則、働用などに背くことである、換言は不秩序なことをいふのである、此故に惡即不秩序なことの出來得る自由は不完全な自由である、斯る自由は眞直なる智慧には適當せぬ

ことである、智慧が明かにして物の性質、其關係其規則などを能く知つたならば、即物の秩序を曉つた智慧ならば決して惡即不秩序なことは出來る筈がない、無邊にして全智なる造物主には決して惡が出來ぬといふは之が爲である、即造物主は全智だから其自由は完全にして振れること缺點なこと誤謬なことは決して出來ないのである、之に反して不完全なる自由即自由の働きに缺點誤謬の出來得るのは有限物に限ることだ、尙論歩を進めていふときは、事の何たるに係らず缺點なく完全に働くといふことは有限物の力に及ばない、これは其性質に超ゆることである、故に吾人が死後天国に於て心が善に固まり毫も缺點誤謬のないやうに働くことの出來るのは、即不完全なる自由を脱れて性質に超ゆる自由を得られるのは全く造物主の特別な聖寵でなければ得られない、因て之を超性の聖寵といふ、されば問者のいふが如く天国は人間の價値が一段下がる所ではない、却て性質に超ゆるは數段數十段も其價値が上がる所である。

(八) 天国は人間の價値を一段低くする所なり、何となれば死後天国に往けば善のみに固まりて自由の能力を失ふといへばなり

(九) 始めあるものは終り無るべからず、然るに靈魂は
始めあつて終りなしといふ不道理なり

(九) 或問、始めあるものは終りあるといふは眞理である、然るに獨靈魂のみ始めがあつて終りが無いといふは眞理に背く説ではないか。

解答、成程一寸考へると如何にもさう思はれる、が然し深く考へれば決してさうでない、先づ始めあるものは終りが無ければならぬといふは何の理由であるか、例へば今生れながらに病身のものがあつた、其者は到底健康に復する筈は無いだらうか、貧しく生れたものは、後に財産家になれないものだらうか、さやうなことは決して云はれない、始めがあるものは終りが無ければならぬといふは恰も是に同じである、眞實にいへば終りは始めに繼がなければならぬものでない、終りの有無は物の性質のみに關することだ、ソコで始めが如何にしても無ければならぬといふは有限物の性質であるが、終りが無ければならぬといふは有限物の性質とは云はれない、換言は終りの無いといふことが有限物の性質に合はなからぬことでは無い、さうして有限物にも色々あつて其性質は物に因て全然違ふのである、例へば石の如き死物と馬の如き活物とは

二つながら有限物といふても其性質は全然違ふ、又感覺記憶のみを具へて居る動物の魂と智慧と意志をも具へて、無邊といふ高尚な思想までも起すことの出来る人間の靈魂とは其性質は比べにならないほど違ふ、故に性質からいへば有限物にも終りあるべきものと終り有るべからざるものがある、有限物だから終りが無ければならぬといふ理由は無い、

此に於て断言する、被造物なる萬物に終りの有無は造物者なる神の聖意に因るのである、萬物は靈魂に至るまで滅せしむるといふ聖意ならば無論滅するのである、終りなく存在せしむる聖意ならば存在するので唯造物主の御自由である、所で造物主の啓示に因れば靈魂のみならず物質までも全く滅しないといふは明かである、殊に靈魂の如きは滅すべからざるものが其性質である、智慧と意志のある無形物は其性質に因て滅すべからざる筈である、尙詳細な事は眞理の本原第二篇に解いてあるから就て看られよ、嗚呼吾人の有つて居る靈魂は終りなく生さるといふが其性質なるほど高尚なもので、吾人の爲に如

(五) 始めあるものは終り無るべからず、然るに靈魂は
始めあつて終りなしといふ不道理なり

(十) 禽獸にも亦た無形的動作あり故に靈魂ありといふべし

何に榮譽なることではないか。

(十) 或問、禽獸にも無形的の動作が見えるから矢張人間と同じく靈魂が有ると思はれる。

解答、禽獸にも無形的の動作が有るから儘かに人間の如く肉体の外に何か無形なるものが有るといふことに就ては近世紀の學者中にも疑ふものは一人も無い、彼等にも思想あり記憶あり想像あり夢あり、又其上愛する、好む、嫌ふ、悦ぶ怒るなどのことがある、けれども是等の無形的動作が有るから靈魂が有るといふ結論は極めて大早計な考である、先づ之を決定するには禽獸の無形的動作と人間の無形的動作とが全く同一であるか否といふことを仔細に観察して而て後でなければならぬ、若し此兩者の動作が全く同一であるならば靈魂の有るといふは無論である、又若し此兩者の動作が全然違ふならば其具へたる無形物も全然違ふといふこともこれ亦た無論である、禽獸と人間の具へたる無形物は之を例へたならば恰度鈍金と人造金との如きもので素人の目は其光澤

に欺かれるが、鑑定家の目を瞞すことは逆も出来ない、是と同じく觀察の足らない者の目には禽獸も人間の如く智慧を有つて居ると視えるだらう、然しながら哲學的的眼光を以て觀察すれば禽獸には眞の智慧が無い、眞の智慧は只人間のみに有るといふことが瞭かに見分けられる、之を解りたいならば眞の智慧とは何であるかといふことを識らなければならぬ、眞理の本源第二篇の第二の演説に悉く書いてあるが、尙之を攝擷んで見やうならば、智慧といふものは單に思想を起す力ではない、種々の思想を比較省察して之を判断することである、さうして此判断といふ働は概念が無ければ出来ぬ、即種々の思想より普通なる点を抽象して一つの思想を造るといふ働が無ければ判断することとは出来ないのである、例へば色々の美しいものを見て美といふ概念を作る、或は種々の正しい行を見て善とか善とかいふ概念を作る、此概念に因て判断するといふ働が出来るので、即是智慧である、

さうして概念を以て判断する智慧は、進みたいといふ性質のものである、故

(十) 禽獸にも亦た無形的動作あり故に靈魂ありといふべし

千) 禽獸にも亦た無形的働作り故に繁殖ありといふべし
 に如何はを進むでも開けても決して満足せぬ、進めば進めば愈進みたくて
 際限がない、即完全と不完全なる概念を比較て益す完全に達したい、然し
 なから今世には真に完全にして缺點の無いといふことは得られない、何うし
 ても満足が得られない、それで社會が進歩するので此進みたいといふ性質が
 社會發達の本である、何と高尚なものでないか、
 禽獸には概念を作る力がないから種々の思想は單獨に起る、決して彼是比較
 て其結果を取て結論するといふこと、即判断することはないのである、故に
 眞の智慧は無い、それで禽獸には少しも進歩發達したいといふことがない、
 彼等は人間と違つて其生來に満足する、詳しくいへば完全と不完全の概念が無
 いから比較ることがない、故に之は缺點だ不便利だといふ考は起さぬ、彼等
 の周圍にある人間の社會が絶えず變つて學問でも習慣でも衣食住でも農、商、
 工でも益す進歩發達するのには、彼等は其目前にありながら其働も常習も萬古
 依然で微少も進歩せぬのである、數千年前の馬、牛、鴉、雉子も蜂、蜘蛛

も今日のものと少しも變らぬ、其生活方が別段巧みにもならず拙くもならず
 い、例へば禽獸の社會は氷が氷結したやうなもので全く固まつて居るから方
 圓の器に従はぬのである、斯く一定不變といふことは智慧のない證である、
 智慧が有るから思想を通ずる言語もない、言語は判断を表はす徴だから、言
 語が有るものは判断がある、又禽獸の起す思想は感覺より來るもの而已であ
 る、依て其思想は明確でなくて曖昧である、感覺的思想である、人間の起す
 思想にも寒さ暑さ痛さなどのやうな感覺より來る思想も随分多い、けれども
 毫も感覺に關係ない思想も甚だ多い、例へば總ての哲學思想、論理思想、宗
 教思想、道德思想、法律思想などは微かも感覺より來る思想でない、智慧が
 高尚なる徳であるのは此思想を起すからのことだ、人間は萬物の長たる所以
 も之が爲である、
 此に於て結論する、禽獸にも人間にも無形的働作がある、けれども其働作の
 性質が違ふ、故に其無形的働作を起させる原因が違ふ、支那の先生は禽獸の
 千) 禽獸にも亦た無形的働作り故に繁殖ありといふべし

(十一) 無形なる靈魂が有形なる肉体に纏がることいふ理は解する能はず

三十

魂を靈魂と名けたが、之は成長、記憶、感覺の三つの能力のみを具へた無形物である、又人間の魂を靈魂と名けたが、之は成長、記憶、感覺の他智慧と意志の五つの能力を具へたる無形物である。

(十二) 或問、

靈魂が肉体に縛られて居るならば有形物でなければならぬ、何せなれば無形物が有形物に纏がれるといふことは不道理だからである。

解答、

人間といふものは無形なる靈魂と有形なる肉体とが合体して出来たものであるから靈魂が肉体に纏がれて居るに相違ない、けれども肉体も亦た靈魂に纏がれて居るのである、換言は肉体と靈魂とは全く結合したものだ、萬物の長と名けられた人間は斯く有形なものど無形なものどが結合したのだから萬物中一番奇異一番解り難い性質なものである、人間の性質に就ては解り難いのみならず哲學上決して知り得られないほど深い論である、斯く意味深きでも決して不道理とはいはれない、不道理と曉り得られぬとは全然違ふ、真正の學問に依て立てられたる定論には、數學幾何學の如き確固解かる眞理を研究

(十二) 無形なる靈魂が有形なる肉体に纏がることいふ理は解する能はず

三十一

する學問ならば、之は道理である、之は不道理であるといふことも定め易い、例へば二と二を加へて四と成る、或は圓の半徑が徑の二分の一よりも長いなどいふことは疑ひなく不道理だと定められる、然し實驗學に於ての研究ならば左やうに輒く定めることは出来ない、例へば總ての有機体が燃焼はどな劇毒が却て藥となるといふことは不道理と思はれるではないか、又水に觸るれば燃へるほど熱し易いものが食料になるといふは是亦た不道理と思はれるではないか、けれども斯く思ふたならば大なる間違だ、人々が日用疎くべからざる食鹽は有機体が焼けるほどな劇毒格魯兒と、水に觸るれば燃へる所の曹胃膜といふ二つの元素が抱合して出来たものである、斯る劇毒藥が抱合して有機体の腐敗を防ぐ藥劑となり、食用品となるといふは實に玄妙不可思議ではないか、之に依て見ると吾人の智慧に不道理と思ふ所が却て實驗に於て不道理でないのである、萬物中に斯る類は何程あるか知れぬ、萬物は吾も人も知る通り死物生物の二種の他ないと思はれる、然るに茲に生物にもあら

(十一) 無形なる靈魂が有形なる肉体に繼がることいふ理は解する能はず

す死物にもあらざるものが存在するといふたならば不道理だといふだらう、さりながら論者よ深思熟考は生物にも死物にもあらざる一種の不可思議物があゝる、吾人は其中間物を日々目撃しつゝあるのである、論者よ粉粒或は鶏卵を視よ、是れ何であるぞ、生物なるか、死物なるか、成程生物と成るべき力を含むて居る、けれども生物とはいはれぬ、何せなれば生物の性質は營養作用をなして絶えず成長するといふことである、然るに粉粒或は鶏卵は之を其儘に放置は何年でも其儘に存在する、然らば死物かといふに無論死物でもない、金石と同類とは決していはれぬ、金石は之を畑に蒔いても或は牝雞が窠の下に暖めても、芽も出さず雖にも孵化しない、然らば何であるか、實驗に因て細密に論ずれば何うしても生物と死物の中間物といはねばならぬ、ソコで無形と有形とは反對である、此反對なるものが合体して一の人間と成るといふは如何にも不道理のやゝに思はれる、然も實驗する所に依て合体して居ることは疑ひないから不道理ではない、如何様にして合体したかは少

(十二) 無形なる靈魂が有形なる肉体に繼がることいふ理は解する能はず

しも解らない、吾人は唯體かに合体して居るといふこと丈分つたのである、尤も無形が有形に變じ或は有形が無形に變ずるといふならば素より不道理である、けれども人間は無形物と有形物が混合したのでもなく、各變じたといふのでもない、只合体した不思議な結合をしたといふのである、若し吾人が明かに之を知り得たいならば無形物と有形物の實際の性質を知らなければならぬ、而しソコナ事は人智の程度以上のことだから無理な注文だ、故に是非とも吾人は現に視る所に因て承知しなければならぬのである、斯やうなことは獨り宗教問題のみならず實驗學にさへ随分ある、例へば化學に於て不道理と思はれることを學者は皆な承知して居る、即ち化學上物質の原子といふものは長、廣、厚があるとは考へられない故に無形といはねばならぬ、然るに此長、廣、厚のない原子が數多集つて分子になれば此に始めて長、廣、厚を有するもの、即ち有形にあると信じて居る、無形の原子が集つて何うして有形の分子に成るか其理由は少しも解釋が出来ぬ、吾人の智慧には不道理と思は

(十二) 實驗學上人体に就ては物質の他別に疑なるものを認めず

れるが、然し化學上の實驗に於てさう無ければならぬから承知するのである、人間も是と同じで一考へれば無形と有形とが結合するといふは不道理のやふだけれども哲學上の實驗に於て是非さう無ければならぬから承知するのである、

此に於て結論する、實驗學上に於て意味深玄にして明確解らぬ説をも信するならば、何故哲學又は宗教上に於ても意味玄妙にして確然解らぬといふても同じく之を信じないかと。

(十三) 或問、

實驗學の研究に依れば萬物は皆物質のみである、靈魂の如き無形物があると

解答、

いふ説は宗教家の愚なる想像に過ぎない。物質を研究する實驗學の他學問が無いならば問者のいふ所は眞實である、然しながら單に實驗學といへば物質を研究する學問とのみはいへない、實驗學にも二種がある、一は客觀的に屬して物質なる有形界のみを研究するもの、一は主觀的に屬して物質以外のもの、五官を以て感じ得られないもの、即只

心内意識のみに感ずる所を研究するもの、此二つである、而て此主觀的實驗學を排るときは、哲學、論理學、法律學、審美學などは無くあつて仕舞隨て愛國心とか忠孝善美義などの高尚なる心を破壊して仕舞なければならぬ、博士グラッセ氏が一千九百一年に當てなしたる生物學に就ててふ演説中の一節に曰く『世間多數の學者が客觀的實驗即五官を以てするの實驗は甚だ信じ易いが、主觀的實驗即心内の實驗は却て信じ難いといふは大に怪まざるを得ない、主觀的實驗といへども、實際に存在することであるから客觀的實驗と同一に之を信しなければならぬ、のみならず實は主觀的實驗は客觀的實驗よりも一層必要なものである、何となれば吾人は主觀的實驗のみを以て自己の存在を識るのである、吾人は身外の物の存在を認める前に先づ己自身の存在を認めねばならぬ、吾は思考る、故に吾は存在するとはデスカルトの云ふ所であるが、抑も之が吾人實驗の第一着歩である、此實驗が無くしては如何なる實驗をも決して成し得られない』と、斯の如く主觀的實驗は總ての

(十三) 實驗學上人体に就ては物質の他別に疑なるものを認めず

十三 實驗學上人体に就ては物質の他別に類なるものを認めず

三十六

學問の基礎なるは必要である、ソコで此主觀的實驗に因て見るときは、人間各自に有形なる肉体の他に無形なるものを具へて居るといふことは何よりも明瞭である、何せなれば人間には無形的働作が多くあるからである、例へば五官を以て感じた物質界の種々な思想を抽象て或概念を造り、之を以て意味深遠なる論議をする、即性學の如き毫も物質に關係ない學問を研究するなどの働がある、又人間は何う考へても物質より出ない思想を起す、即無邊といふ思想を起す、物質の性質は有限であつて如何に物質界に索ねても決して無邊なる思想を起す原由がない、又其他善惡道德の念があつて善を好み惡を嫌ひ、義を喜び不義を惡むなど、いふ無形な働が數々ある、さうして斯やうな働は何の爲にあるかといふに、凡て働といふものは其物の性質に適當しなければならぬといふは疑ひない定論であるから、有形なる物質は有形的働の外出来ない、無形的働を作すといふは物質の性質に適當せぬ、無形的働は是非とも無形物の作すでなければならぬ、この明かな規則を承知せぬ

ならば總ての學問は悉く潰れて仕舞、

ソコで人間の働はといふと有形的無形的の二種ある、即歩む、着る、聴く、視る、痛むなどの働作は有形的にして肉体の作すのである、又右に陳べた道德の念といふが如き無形的作用これは何うしても無形なる物の作すのでなければならぬ、其無形なる物、之を日本語にタマシヒといひ、漢語に靈魂といひ、拉丁語にアニマといひ、英語にソールといふのである、語は國に依て違ふが指すものは無形的作用のある無形なるものである、悉くいへば有形物をも無形物をも曉る智慧と、其曉り得たことを喜び或は惡むの意志との二の能力を具へたる無形物を指していふのである。

(十三)或問、

萬物は凡て元素の化合力引力の作用に因て成立ち其分解に因て其形を失ふものである、人間も矢張同一で元素の化合引力に因て心身ともに出來、其分解に因て消滅する、別に靈魂といふものは無いのである。

解答、此難問も前提のと略同じで、多くは醫師などの立てる論である、西洋でも同

(十三) 人間は物質固有の力に因て成立つものなり

三十七

(十三) 人間は物質固有の力に因て成立つものなり

三十八

且く此論を立てるが只一層簡單である、曰く「吾人は決して解剖刀の尖に靈魂を發見し能はぬ」と、これ實に笑ふに堪えた淺薄な考へではないか、死体といふものは既に靈魂は離れたものだ、故に何程細密に解剖したとて何うして靈魂を見出すことが出来やう、又解剖といふ有形的の所作に因て無形物を見出したいといふは宛も顯微鏡を以て星界を観察したいと同じで到底出来ない話だ、斯る價値のない論は措くとして、先右にいふ萬物は元素の化合力引に因て成立つといふことに就て論じやふ、元來萬物といふ語は餘り廣過ぎることで、化合力引に因て成立つといふには物質といはねばならぬ、化合力引力は物質のみに具へて居る力だから、物質は化合力引に因て成立つといふたからばこれは眞實である、さうして人間には化合力引力の他なる力、物質以外の力がある、例へば吾人が數學幾何學とか、語學文學とか、論理學審美學とかいふものを學ぶには化合力引力を以てするであらうか、或は又吾人が富士山嶺に於て朝暉輝々たる黎明の景色を眺めて其美に感ずる

(十三) 人間は物質固有の力に因て成立つものなり

三十九

のは是亦た化合力引力の爲す所であらうか、或は又悲憤慷慨の愛國演説を聴いて感奮の餘り自己の生命を鴻毛よりも輕んずるは豈に愛國心を深めるのも同じく化合力引力の爲であらうか、吾人は苟も是等のことを考へ來つたならば、物質的力なる化合力引力の他別に高尚な力を具へて居るといふことは噫々なることではないか、さうして力のあるのは其力を具へたものが有るからだ、即ち其力を働かせるものが無ければならぬ、さもなければ力といふものは只思想のみで實際には無いとせねばならぬ、換言れば蒸氣が無ければ蒸氣力があるべき筈がない、火が無ければ熱も光も有る譯がない、物が無ければ運動力が無い、人間は物質なる肉体があるから化合力引力もあつてこれが實際に働く、然しながらこれのみでない、道理を悟るとか、美を感ずるとか國を愛するとかいふやうな高尚な働きを爲す力を具へて居る、此高尚な力は肉体なる物質に具へて居らぬ、故に何うでも肉体の他に此高尚な力を具へたものが無ければならぬ、之を名けて靈魂といふのである、此靈魂があるから右

(十四) 精神作用は頭腦の組織より生ず

いふ高尚な力は實際に有つて居つて實際に働くのである、肉体が無ければ化合力引力が無い、同じく靈魂が無ければ、學問を研究する、美を感ずる、國を愛するなどの物質以外の力が有る理由がない、故に靈魂が無ければならぬといふは疑ひない論理である。

四十

(古)或問、

解答、

精神作用は頭腦の功妙なる組織より生ずるものである。前掲の第十一及十二、十三の難問の如く人体には別に無形の靈魂といふ如きものは無いとか、或は有つても有形物であるといふやふな説は近年に至て一層理窟を進めて如何にも意味深いやふに説を爲すものが無宗教家に往々あるが、斯やふな考を起すといふことが既に人間に無形なる働きがあるといふことを立派に證明するものである、道理に因るも實驗に因るも物の働きは凡て其物の性質に適合して居らなければならぬといふことは甚だ明かな定論である、之を以て眞正の學者は有形なる腦髓が無形なる働きをなすといふやふなことは決して云はない、さやふなことを云ふのは半熟先生に限るのである。

る、然しながら近年に於ては随分學者を以て目される者が説を爲していふ、「有形なる腦髓は無形の働きを爲すことは出来まいけれども其組織の巧妙緻密なるが爲に精神作用が生ずるのである、換言れば無機体なる物質が無形の作用を爲すことの出来ないのは勿論であるが、有機体の如く完全なる組織を爲すに至ては其組織が無形的の精神作用を生せしめるのである、例へば無機物は其性質が惰性であるから自ら運動することは出来ないけれども其物質が巧妙に組立てられ、ば之に因て運動するやふにあると彼の時計蒸氣車を見ても知られる、有機体も是と同じく無形の働きは其物質なる性質に合はぬから出来ないけれども、其組織が巧妙に完全であるならば其性質に合はぬ働きといふても出来るやふになる、即其組織が精神の如き作用を起すに至るのである」と、是は實に上手に出来た理屈である、深く學問に達せぬ物の皮相のみを考へる人は甚だ欺かれ易い説である、然しながら無形的精神作用が腦髓の組織に因て生ずるといふは證據の無い説だ、物質論者の臆側想像に過ぎない、

(十四) 精神作用は頭腦の組織より生ず

四十一

十四 精神作用は頭腦の組織より生ず

四十二

尤も臆説にせよ想像にせよ、若しも其説が明かに知られたる定論に抵觸ない限りは直に之を排斥する所以はないのである、他日學問の進歩に因て其是非を證明されるまで暫く假定説として置くが可い、之に反して如何に珍しい想像説にせよ、明かに知られたる定論に抵觸く以上は直に之を排斥しなければならぬ、何故ならば真正の定論は確乎不規則でこれが學問の基礎だからである、されば真正の定論に背く説は如何に學問が進歩しても決して其真あることを證明される期は無いものである、ソコで右論者の説は如何といふに、總て學問の基礎なる定論を潰すものである、所謂基礎なる定論とは、總て物の性質は其物の具へたる徳、力に因て現はれ、徳、力は其作用に因て現はれ、作用は其作用の形跡に因て現はれる、故に總ての働きの形跡は其働きの爲すものと全く同じ性質でなければならぬ、換言れば結果は何時も原因に同じ類でなければならぬ、といふのは是が形而上形而下に係はらず一切の學問の動かすべからざる基礎である、此定論に反するのは學問に反するに同じだ、若

し此定論を破壊すならば如何なることも知る、曉る、判断するなど出来なく成つて仕舞、吾人は此定論に従て森羅萬象の働きの形跡に因て其働きの性質を判断することが出来る、即結果に因て原因を究めることが出来るのである、今種々の例を擧げて見やふに、先づ地質學上地球の種々の地層を研究するのも此定論を基礎としてゐる、即地層の形跡を視て昔の働きの力を判断する、例へば砂土層、粘土層、石炭層などを視ては決して火成層でない水成層であると判断する、又富士近傍の火山岩を視ては決して水成層でなく火成層であると知る、何せなれば火の作用と水の作用とは全く別な働きであること知つて居るからである、又第四地層の初期に於て火を用ひた蹟或は石に畫いたいろくの象形、或は築造物の遺跡なせを視れば、是は往古の動物の所業の遺跡とは決して思はぬ、何せなれば斯やうなことは決して禽獸に釣合ぬ働きで何うしても人間の所業でなければならぬと知るからである、何でも皆之と同じだ、光澤のある滑らかな板は決して鋸を以て挽き放しの板で無

(十四) 精神作用は頭腦の組織より生ず

四十三

十四 精神作用は頭腦の組織より生ず

く飽の懸つたことを証明して居る、銃丸で殺された人の負傷は決して刃物の負傷とは思はれぬ、政治の紊亂で、汎た國は饑饉の爲に亡びたとは思はれぬ、放蕩の故に破産した家は詐欺に遇つて身代限したとは云はれぬ、斯る類の例を擧げたならば際限がない、要するに働きの形跡は其働きの同じ類でなければならぬ、釣合て居らなければならぬといふ定論は毫厘も疑ひないことである、果して然らば無形と有形とは決して同類でなく却て反對なるものである、故に有形なる物質が決して反對なる思想、概念、判断などの無形にして而も高尚なる作用を爲すことか出来ないといふは何よりも瞭然なことでは無いか、人間の頭腦といふものは之を分析して視たならば酸素、窒素、炭素、燐素などの數元素より成立つた有形体の機關である、此機關は總ての有機的の形の中に一番完全なる組織なることは疑ひない、其組織の緻密にして巧妙なることは未だ人智に解らないほどである、之を顯微鏡下に檢れば何干かの微細い神經細胞と纖維の集合であつて、之に智覺を司するものと運動を司するものとある、視官を司する神經と聽官を司する神經とは別である、又意志に従ふ神經もあり意志に従はぬ神經もある、同じ感覺でも熱さを感じる神經と寒さを感じる神經とは違ふといふことまでも近年に至つて解つた、斯く神經細胞と纖維は機關に因て各別々である、これが最も巧妙に組織られて全体の機關を支配して居る、けれども如何に巧妙に組織られても腦髓は有形物であるから其組織も無論有形的であつて従て其働きの有形的でなければならぬ、元來組織といふことは形狀の變化であつて性質の變化ではない、故に組織に因て其組織る物の性質を變ずることは決して出来ない、物質は如何に組織られても矢張物質である、其働きの物質的でなければならぬ、物質が組織られて有機体と成り生物となるのは組織が原因に成つたのでなく他に原因があつていある、(委くは次の章を看よ)されば人間は無形的働きのあるは決して有形的組織が爲すのでなく他に之を爲さしむるものが無ければならぬといふは眞理にして疑ひない、左もなければ右に擧げた定論原因と結果は釣合はぬ

十四 精神作用は頭腦の組織より生ず

ものどある、視官を司する神經と聽官を司する神經とは別である、又意志に従ふ神經もあり意志に従はぬ神經もある、同じ感覺でも熱さを感じる神經と寒さを感じる神經とは違ふといふことまでも近年に至つて解つた、斯く神經細胞と纖維は機關に因て各別々である、これが最も巧妙に組織られて全体

(十四) 精神作用は頭腦の組織より生ず

ばあらぬ、動くものと働きの跡とは同じ類でなければならぬといふ規則に背く、即道理にも實驗にも合はぬことである、論者は前きに物質は惰性で自ら運動することは出来ないが若し時計や蒸氣車の如く巧妙に組立てたならば其物質の性質に無い運動を起すといふ例を引いたが、之は組立が運動を起させたのではない、如何に巧妙に組立てられた時計でも人が其彈機に原動力を與へなければ決して動かぬ、蒸氣車にしても鐵に水を入れ火を焦ら螺栓を以て蒸氣の出入を加減する機關師火夫が無つたならば運轉せぬ、無形物なる機械は決して自ら運動するものではない、殊に又時計や蒸氣車の働きは其の性質に合はぬ働きではない、全く同じ類の働きである、時計蒸氣車が無形体なる物質なるが如く其の働きも物質的働きで即運動といふことのみである、論者が之れを引例としたは大なる間違ひである、此の故に何う考ても動くものと働いた跡とは同じ類であるといふ定論は眞理である、依つて働きの跡即結果の性質を見て動くもの即原因の性質を判断するといふことも亦た眞理にして

疑ひあり、

是に於て結論する、人間といふものは問者も承知する如く無形的働きの多くある、即思想、概念、判断などがある、此思想、概念、判断が無形的ならば此の無形的働きの爲せるものも矢張無形でなければならぬ、さうして其の無形物は肉体の他にあるのである、吾人之れを稱して靈魂或は精神といふのである、

毎度いふ通り近年に至ては學問の進歩に由て人間の智慧が益明かに成り、曖昧な論は何の値もない、昔古の如く巧辨とか理窟を以て論ずることは出来なく成つた、只道理と眞の學問に依るの外は無し。

(十五) 生命も矢張化合力引力より出る現象である、故に人間には此等の力の他決して靈魂などいふものはない。

解答、これはなかく意味が深い難問である、之を明かに説明するには生命とは何かといふことを曉らなければならぬ、生命の定義に就ては今より凡そ三千年前

(十五) 生命は物質固有力の作用に他ならず

(十五) 生命は物質固有力の作用に他ならず

に於てプラトン、アリストット、ヒポクラットなどの學者を始めとして二十世紀の今日の學者に至るまで皆種々に研究したが、未だ之を一定することが出来ない、學者に因て意見が違ふ、今此等の中で最も高名なる學者等の定義を擧げやうならば、プラトン、アリストット、ヒポクラット等は曰く「生命は無形なる力の現象である」と、又十七世紀の頃獨逸國の化學者スタール氏は曰く「生命は靈魂の作用の結果である」と、デイードロ氏は曰く「生命は死に反することである」と、十八世紀の終りに至り實驗學の進歩は生命の定義を一變した、即生物學者ビシャット氏は曰く「生命は死に抵抗する現象である」と、十九世紀の始に至て動物學者キュヰー氏はビシャット氏に一步を進めて曰く「生命は化合力、引力等の物質的力に抵抗する力である」と、ヘルベルト、スベンセル氏は曰く「生命は反對なる作用の連合である」と、デュセス氏は曰く「生命は有機体特有の作用である」と、デュセス氏の定義は生命は生命なりといふに同じだ、

さて斯く昔から千種萬様の定義を立てた所を以て見ると實にバスカル氏がいふ如く世には定義を決められないものがある、生命は如何あるものかといふことは誰人も知つて居る、而て其定義は決められない、斯ういふ譯だから十九世紀中最も高名な生理學者クロード、ベルナル氏は生命に定義を下さずしていふに「世界にあらゆる現象の本原即萬物の性質を明かに決めたいといふは大なる誤謬である、其本原は決して實驗學の研究すべき問題でない、實驗學の研究し得べき範圍は現象の近因のみである、故に化學者が化合力の性質を研究し得ざるが如く生物學者が生命の性質を研究し得られない筈である、如何となれば個は人智に及ばざることで學問に因て知るとの出来ないよだからである、生物學者の研究すべき範圍は只生命の状態、其作用、其發育、其消失等の形狀のみである」と、さうして氏は生命に就て一の珍しい書を著して生命と云ものは物質的一切の力と特種な力の結果であるか、將た化合力、引力の如き物質的の力のみの結果であるかといふことを詳細に論じたが、これは恰度右の

(十五) 生命は物質固有力の作用に他ならず

（十五） 生命は物質固有の作用に他ならず

五十

難問の答に能く答へて居る、今其要を摘まんで見れば左の如くである、生物を研究すれば其多なる作用の中に生物の特徴ある作用は二つある、一は營養といひ、二は生成といふ、營養とは何か、營養とは例へば燃ゆる火の如きもので、火が絶えず燃ゆる爲には其焼け遣つた物即灰は之を排除して別に新たな燃焼物を供給しなければならん、生物の生存の爲にも是と同じ營養といふ作用が是非必要である、次に生成とは何か、生成の作用には種々ある、即陳くなつた所を新しくする、傷けた所を癒す、と又其他自体と同類なるものを殖やすの生殖作用などである、此營養と生成の二つの作用は合力引力の物質的力を以て働くとといふことは疑ひないといふことに就て種々の証據を挙げ、然して後論じていふに生命は合力引力を以て働く現象ではあるが決して生命の本原でない、生命を發する爲に又其發生した生命が保続く爲に營養するといふは合力引力の他なるものが無ければならぬといふことを証據立てる、然しながら其合力引力の他なるもの、何であるかといふことは生物學の範圍

でないから論じてない、問者が右のことを承知する爲に茲に其クロード、ベルナル氏の結論だけ譯さう、曰く「生物の特質は引力排斥力合力なせいふ理化學的特性ではなくして、豫め一定の目的思想に因て生物を造つたといふにある、尤も彼の細胞の組織の如きは物質の理化學的特性を司配する法則に因て出来るには相違ない、けれども純然たる生命其物は物理にも化學にも係らない、全く此生物界の生力發展を指導する思想に關するものである、萬物は皆之を創造、之を主宰る思想より發するものである、成程現象は理化學的作用に因て發顯れることは瞭かだけれども、然し生命の問題は是が爲に解決されたとは云はれない、凡ての物が豫め一定の意思畫策に因つて組立てたものあらば無論偶然の結果とはいはれぬ、世界の現象は物質の力に屬するけれども、其相互の關係から観るときは、何うしても其間に特別な連鎖があつて、何か見ぬない指導者に導かれて進みつゝあるやうに思はれる、故にヒボクラットも既に此理を認めて、生物体の機關は個々に孤立して居るものは一つもな

（十五） 生命は物質固有の作用に他ならず

五十一

(十五) 生命は物質固有の作用に他ならず

い、皆相互に助け合ひ持ち合ふて一の生体を組立て居るのであると断言したのである』と、斯やうな結論をした論者は獨りクロード、ベルナル氏のみにない、デュナンといふ生物學者も同じである。曰く『生物は其生命の目的を離れたる世界に入れば、立所に冷酷なる理化學的法则の作用に壓倒されて滅亡して了ふ』と、猶又フイエ氏は平易の例を擧げていふに『時計は時間を表示す爲に造られた器械といふも其一部分の各自の働きは皆一も其時間を表示す直接の目的ではない、彼等は各々自ら一定同様に繼續して行く目的があるでもなく、前の方法が足らぬときに缺けたときに自ら新たな方法を起すといふ譯のものでもない、試に其車輪の一に手を觸るれば忽ち停止して最早時間を表示さぬ、左に廻る車が續いて時間を表示す爲に右に廻らうとはせぬ、發條機が折れれば針は決して他の發條機を待て廻らうともせぬ、之に反して彼の鞋の如きは其右の前肢を失つたとき、其右の後肢を酸蝕で焼けば、彼は必ず其酸類を拭取る爲に他の方法を撰びであらう、即彼は常に右の後肢を拭く爲に

右の前肢を使ふのが常習であるが、右の前肢が無いから其代りに左の前肢を以てするやうに成る、是に由て觀れば生物は一の機關が破損でも(其身を保存するといふ)目的は依然として續いて居る、生命ある時計ともいふべき生物は其時間を表示すといふ目的(即生存)に向つて働きを繼續して居る、即發條機が破損でも残つたものを以て發條機に代へて居る、實際にいへば時計の時間を表示すといふ目的は時計其物には無い、時計の外にある、即時計師の思想に在る、之に反して生物の生存したいといふ目的は生物の外に在るでなく内に在る、さうして其目的が總ての發動の根原になるのである』と、右學者等の説は實に解易いではないか、蒸氣船といふものは火力を以て水を蒸氣となし其力で進行機を廻轉して船を遣りたい所に進ませるのである、これは理化學的の力のみを以て働くに相違ない、けれども火夫とか機關師とか舵夫とか猶又最も大切なる船長とかいふものが無れば船は何の働きもせぬ、船の運轉は何うしても理化學的の力斗りでは出来ない、其他の力即人間が無

(十五) 生命は物質固有の作用に他ならず

(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

ければならぬ、生物も宛然蒸氣船のやうなものである、其生成其營養、其發育などの爲に物質的力が必要なるは勿論だが、然し其のみでは足りない、其他に別な力を具へたものが無ければならぬ、其が即生命の本原だ、眞の生命だ、之を人間に於ては靈魂といひ、禽獸に於ては靈魂と異なる無形なる魂、草木に於ては純粹の無形でない或力である、

世界の歴史に由れば昔から如何なる國でも生命の本原は目に見えない合點の出來ない不思議な力の結果であると皆思ふて居つた、然るに其考が廿世紀の進歩した哲學に能く當つて居るといふは感心ではないか、以上論ずる所に依て生命は化合力引力などの物質的作用より出る現象だといふ説は今の生物學に合はぬ、實驗學に背く論で、人間に靈魂が無いなどとは決していへないといふことが解つたであらう。

(其)或問、進化説に依て見れば動物中最も高等なる人間は下等なる動物より進化したものである、故に舊約全書に記してある如く造物主に造られた者ではない、物質自然の法則に因て出來たものである、之を以て人間は如何に高等なるものにせよ他の動物と同一性質である。

解答、進化説は日本に大に流行したが、之を詳細に駁するならば一冊の書物にしても盡せぬ、依て其要點だけを概略論じやふ、先づダルヴィンの立てた進化説は天主教の教義に反するものでないから別に禁じられた説ではない、若し之を賛成したいならば賛成しても敢て差支はないのである、何せなればダルヴィンのいふ所も人間の肉體は下等動物の進化したものだけけれども、畢竟造物主に造られたといふことに成る、只直接に造られたでなく間接に造られたといふの違ひだけである、故に肉體の本原は造物主であるのだ、猶又彼は進化

した所の肉體へ造物主から直接に靈魂を入られたといふことを信じて居つた、天主教に於て禁ずる進化説はダルヴィンの徒弟其亞流なる論者の腐敗した無神進化説である、彼等はいふ「人間は別に靈魂を有つものでない、只完全なる動物たるに過ぎない、故に造物主に對して毫も宗教的關係は無し」

(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

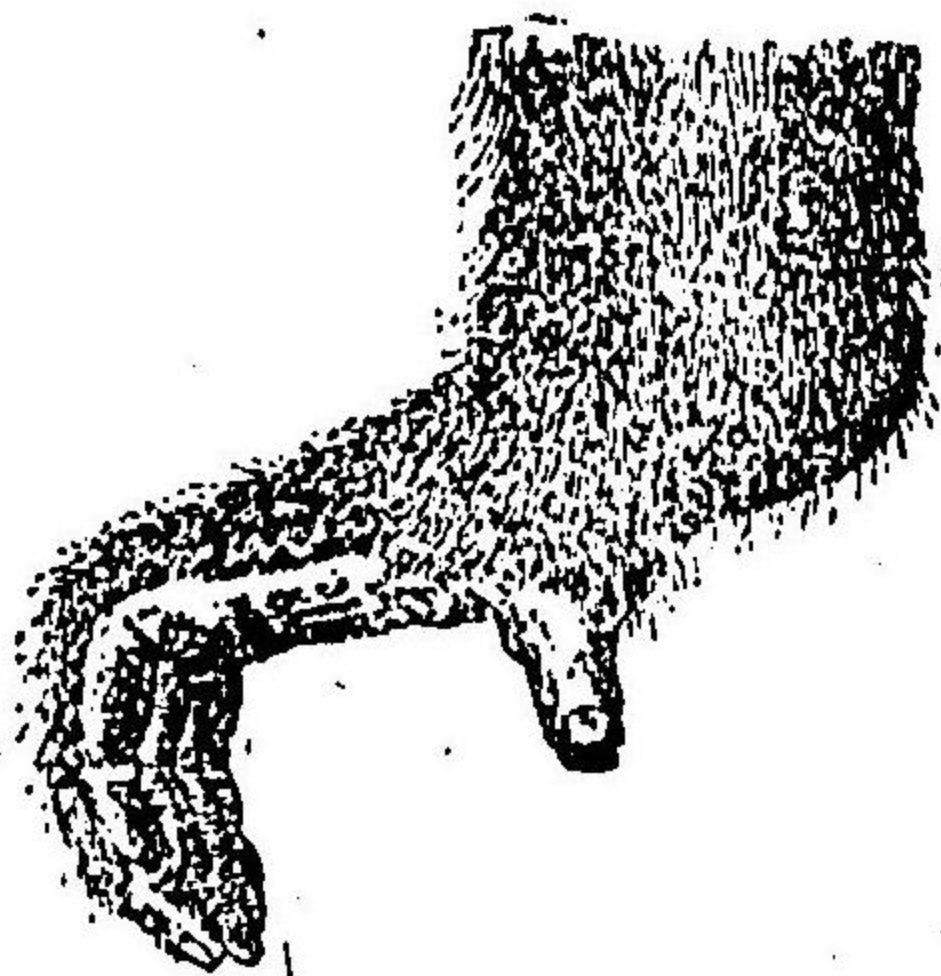
と、これが天主教に於て禁ずる説である、舊約全書に録してある所は「造物主が土より人の肉体を造る」といふので其意味は明かに定まつて居らぬ、故に如何様に造られたかといふことは人の考に因て違ふ、即造物主が直接に人間をお造りなされたか、或は間接に進化の法を以て下等動物より次第に完全な人間に成つたかといふことは解釋の仕方の違ひである、何れにしても人間は土より造られたのに相違ないのである、是ダルフインの進化説は天主教の教義に背かぬといふ所以である、然しながら往古から天主教は人間の肉体も靈魂も直接に神に造られたといふ説を容れて居る、けれども之が一定の信仰個條の中ではない、之に就ては如何様に信ずるとも其は名目の自由である、之を以て背教者として退けるといふことはない、假しんばダルフイン説を信じても之が爲に宗教的關係は切れない、彼のダルフインは造物主を堅く信じて随分熱信な宗教家であつた、斯ういふ次第であるから今茲にダルフインの進化説を取るのは宗教上からするのでなく真理學問の上からするのである

るといふことを豫め承知して貰はなければならぬ、今日の進歩した實驗學に因て見ると進化論者の立てた証據は薄弱で足らないのである、單に臆説といふに過ぎない、けれども此論は決して無益で無つた、

第一圖



人間の足

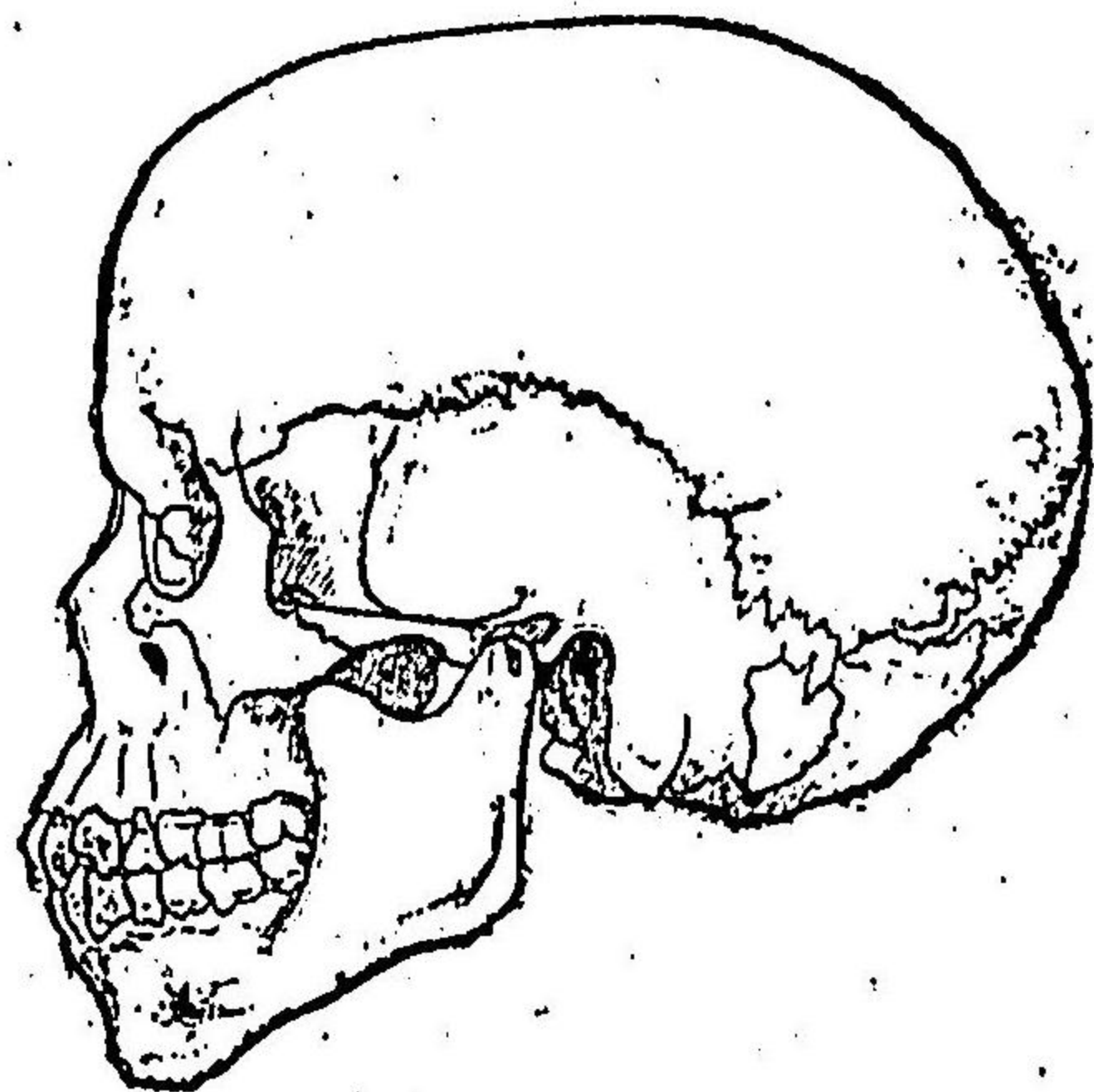


猴の後肢

之が爲に生物學は大に研究されたといふ利益があつた、先づ進化論者の立てた証據は之を四つに概括することが出来る、今茲に順次に擧げて論じやふ、第一、高等動物格別猴の体格と人の体格とは酷だ相肖たるもので、兩者とも

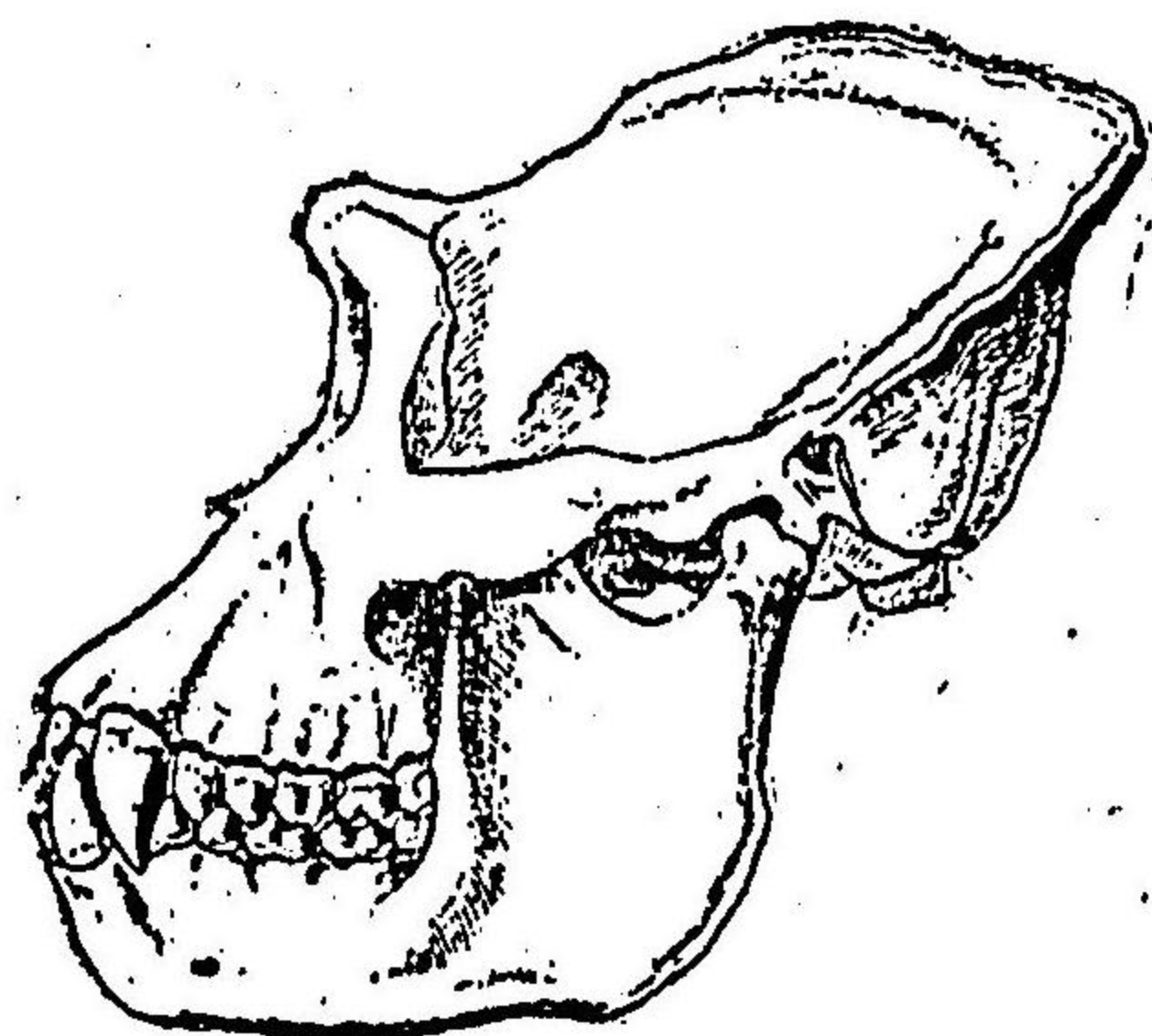
(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

圖 二 第



骨 蓋 頭 の 間 人

・ 圖 三 第



骨 蓋 頭 の 猴

い、例へば第一圖に示すが如く人間は手と足とを有つて居る、然るに猴は足
あくして手のみだ、猴の後肢は足でなくて手である、故に人は直立して歩行

千六 人類は下等動物より進化したるものなり

五十八

同一機關を具へたものだから同一のものであると論證する、
成程同様な体格であることは云ふまでもない、が然し大に異つた所も少くな

し猴は樹を攀る、種類が全然違ふ、又鼻の形、毛の生へ方、別けても頭蓋骨
の形と其縫合とは大變な違ひである、(第二圖及第三圖を看よ) 又其のみなら
ず頭蓋の内積が大きいから脳量が違ふ、最も大きな猴の頭蓋の平均量は五百
立方センチメートルで人間は亞非利加の如き野蠻人でも羅歐巴人でも其頭蓋
の平均量は千五百立方センチメートルで猴の三倍に當る、是でも同じだとい
はれやふか、

第二、人体は胎内に孕む時は下等動物と同一な生長し方である、即高等動物
も人間も同一方法同一順序を以て生長する、故に人間の胎兒は他動物に似た
る所が種々ある、例へば六ヶ月の胎兒は獸の如く手足の掌を除く外全体に毛
がある、人間に於ては産れる前に此の毛が無くなる、斯く胎兒の生長の同一
なるは本と同類なることを證するに足ると論ずる、

成程似たる所がある、けれども之を以て同類なることを証するには足らな
學者等も人間が他動物と全然異なるものとは言はない、却て大に似て居ると

(十二) 人類は下等動物より進化したるものなり

五十九

(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

六十

いふのである、人間も他動物も肉、脈、骨、目、耳、口、脳、神経などの機關を具へた生物だから似た所の多いといふは當然のことだ、然しながら他の類であることを証するは違つた所も多い、例へば猿の胎兒に於ては後腦が前に出来るが人間の胎兒にありては前腦が最も始めに出来る、斯く腦の如き最も重要な機關の生長が違ふ、此故にグラシオン氏はいふた「人間の胎兒は如何に高等動物の胎兒に似るも、其何ヶ月の時たるを問はず、判然人と動物の胎兒たることを見分け得られる」と、

第三、發育不全と名ける機關のあるを以て証據していふ、他動物に必要な器官が不必要なる人間にある、これは動物時代の遺殘物で、例へば耳を動かすの筋或は内眥の第三眼腺の如きである、これは人類が高等動物の遺殘なる徴證である、

論理に由て見ると是等も進化の確證とするには足らない、これは世界萬物の普通の規則であつて、萬物に調和と秩序のある證である、彼の蜩斗は魚と

同じやよな成長し方だから蛙は魚の進化だとは云はれないだらう、蝶は毛虫より出るから蚯蚓と同じ種類だとはいはれないだらう、同じ機關があるから同類だといふ論理は是と同じだ、決して學問を以て見るべきものでない、證據のない廣すぎる斷定だから想像といふのである、

第四、生物には同化といふことがある、昆虫、蛇、鳥の中に或ものは他動物の目を免れて其害を防ぐ爲に棲んで居る所のもと同じ色に化せられて、其生存と繁殖を助ける、動物が生存競争の爲に同化作用のあるのは進化するといふ證據である、

成程其棲む所の周邊のものと同じ色のものもある、けれども極めて少い、又斯く同化するのが真ならば、同種類のものは皆亦同化作用をしなければならぬ、所が實際はさうでない、例へばラセルタ、ヴィリデイといふ蜥蜴は緑草の中に棲んで居るから全体が綠色であるが、右と同じやよなラセルタ、オセツラといふ蜥蜴は何時も草の無い磯礫地に棲んで居るのに矢張其全体が而も右の

(十六) 人類は下等動物より進化したるものなり

六十一

〔十六〕 人類は下等動物より進化したるものなり

蜥蜴よりも一層美しい緑色であるではないか、
 以上四つの論證は如何に珍しい考であつても臆説である、假定に過ぎない、今日は
 實驗學の進歩した世紀に於ては臆説を以て證論することは出来ない、今日は
 最早百年前の古とは大に違つて眞の實驗のみを信する世紀である、
 右の他尙進化論の實驗學に合はない所は澤山ある、例へば地質學に因て見れ
 ば生物の發生した何万年前の太古より人間の有り始めた時までの間には草木
 禽獸は何度も生滅したのである、即地震とか洪水とか其他種々の天變の爲に
 前にあつた草木禽獸が全く地球上に無くなつて、後又別に前と違ふ草木禽獸
 が出來たといふことは度々あつた、是は先づ進化説と全く反對な現象である、
 猶又何の順序もなく前の動物と少も似寄らざる完全な動物が突然に出現たこ
 とがある例へばマストドンペンチウルといふ象に似た動物或はデインウラム
 といふ支那人の所謂猿に似た動物或はマカイロドスといふ總ての肉食獸と異
 ふ肉食獸などが遽かに發生して何千年の間繁殖したのが其類まで残らぬや

〔十六〕 人類は下等動物より進化したるものなり

うに全く滅して仕舞たといふやふなことは進化説に於て如何様に之を説明す
 か、人間も矢張同じである、進化論者ダルフイン及び其徒弟はいふ「人間に
 最も近い動物は猴で在、けれども、今の猴と人間は餘り其間が懸隔つて居る、
 故に人間は猴から直接に進化したのではない、猴と人間の間 猶一種のものが
 あつて其物から進化して人間と成つたのである」と、而して其中間物をピテ
 コイド人と名けた、然るにその珍しい人間は今日少しも見當らない、世界中
 何れの國にも接ひて居らぬ、のみならず地質學研究者が如何種々の地層を掘
 て調べても其遺骨の一つをも見付けない、斯く遺骨さへも發見さなくとも進
 化論者は決して口を噤まないものである、さうして尙他日地質學が一層進歩し
 たならば必ず發見される期があるだらうといふて居る、斯く見たことの無い
 遺跡さへも無いものが昔に生存したといふことは何に因て知つたか、毎度の
 ふ通りかゝる想像かゝる臆測を以て説を立てたのは學問でない、論理に背
 く、若しも想像に基いて論を立てし可いならば眞の學問は潰れて仕舞、進化

(十七) 人種の別あるは一元祖ならざる證なり

六十四

論の地質學にも生理學にも合はない所は此外夥しくあるが之を悉く陳べることは到底出来ないから省くけれども、進化論の眞の學說とするに足らないといふことを知る爲には右に挙げた丈で充分である、依て茲にトビナル氏の言を借りて結論に代へやふ、曰く「最高等なる動物にても其人間との間には、到底埋没し能はざる大なる溝渠がある、此故に人類は他の高等動物に超越するものである、而て其超越する所は有機体が無機体に超越せるほど其程の進みである、之を以て人類は決して畜類の子孫でない」と。

(七) 或問、

舊約全書に依れば人類は一夫婦より繁殖したものだといふが、學問上から見れば人類は四つに分けられてゐる、シテ見ると舊約全書は古代の無學な思想を以て書いたものであらふ。

解答、

天主教に於ては世界の人類は悉くアダムといふ男とエワといふ女の子孫で、人類は一つの元祖より出たといふことを舊約全書に従つて堅く信じて、學者等が如何程諷いでも理窟をいふても或は科學が進歩しても決して懼れぬ、其

信仰を何處までも維持のである、何せなれば舊約全書は造物主の默啓に因て書いたものだから必ず虚偽や間違は少しも無いと知つて居るからである、然し右のやうな難問をする人の爲にはこれでは信じないだらうから聊か説明を試みやふ、先づそれには右の難問の歴史ともいふべきものを挙げるが捷徑である、十七世紀の頃までは一般に人類は一對の元祖より出たを信じて居つて之に就て反對するものは少しも無つた、斯やふな論を立て初めたのは西暦一千六百五十五年に當てラ、ヘイレンといふプロテスタン教徒である、此論の眞偽を究めたいならば動物學者の說を聴かなければならぬ、學者は世界の人間を幾種にも分類した、之を人種といふ、然るに人種の分け方といふものは決して一定して居らぬ、學者の考に因て各違つて居る、茲に人類學者の分類せるところを挙げて見れば、

リンチ氏は地理を基礎として世界の人間を四種に分けた、即歐羅巴人種、亞細亞人種、亞米利加人種、亞非利加人種である、

(十七) 人種の別あるは一元祖ならざる證なり

六十五

(千七) 人種の別あるは一元祖ならざる證なり

ブルマンバック氏は皮膚の色を以て五人種に分けた、ドゥメル氏は顔面の形状を以て五人種に分けた、ヴィー氏は顔面の角度に因て二大人種に區別した、一は八十五度以上の角度を有するもの、二は八十五度以下の角度を有するものとした、

ヘツケル及フックスレーの二氏は頭髪の形状に因て直毛種、縮毛種の二つに區別した、

キヅニー氏も亦た前掲のブルマンバック氏と同じく皮膚の色に因て別けた、けれども氏は白色、黄色、黑色の三人種とした、

ド、カトルンフツウィ氏は頭の形状を以て高加索、蒙古、エチオピックの三種に區分した、

斯の如く人種の區分といふものは學者に因て各異なつて居る、のみならず同じものを以て區分の標準としてさへも違ふ、例へばブルマンバック氏もキヅニー氏も皮膚の色を以て分けなから一は五人種とし、一は三人種とした、

之を以て見ると吾人は問者の言を借りて學問は眞でないといふのである、問者よ斯る難問をするには豫め先づ學者の區分した人種の中に五種に分けるが眞か、或は四種か、三種か、二種か何れが眞正の區分かを決めなければならぬ、之が決まらない中は人間は本一種でないなど、は決して云はれない筈ではないか、

十九世紀の中頃に至つては動物學生物學が益進歩したからド、カトルンフツウィ氏は人種に就て深く研究を重ね、自分が始めに爲したる人種の別を取消してゐるに「元來人種の區別が曖昧であつたのは、全く類といふこと、種といふことの意味を明かにせなかつた罪である、故に苟も人種を區別するには先づ此類と種とを明かにせねばならぬ、さうして類とは何であるか、種とは一の配偶より繁殖たる同一系統の似寄のもの、團合である、種とは何であるか、類よりも一層狭き範圍にして一類中に多く含まるゝ全く同一なるものゝ小團合である、近く曰へば類は生物的原則なる親子の關係より生ずる

(千七) 人種の別あるは一元祖ならざる證なり

(十七) 人種の別あるは一元祖ならざる証なり

六十八

ものである、此確實なる原理を應用して研究すれば人間は疑ひなく一類である」と、ド、カットル、フワージエ氏が此の確實なる原理を擧げない前は人類を以て人類の區別と考へた、故に人類は一元より出たものであつたかと思ふたのである、而て人種の區別は斯く區々であつたから人類が幾つもあると考へても殆んど五里霧中で少しも解らなかつたのである、ソコで斯く人種の區別が曖昧で判然決めることが出来ないのは何故ぞといふに實は人類は一元より出たものであるから民に因て多少形状の相違があつても究極當然たる限界が無いからである、委しくは黄色なる亞細亞人種の中にも白色のものも往々あり、白色なる歐羅巴人の中にも黄色なものも間々見ゆるとか、いふやふな譯だからである、其他顔面の角度でも、頭の形状でも、頭髪でも皆同じく種々に混交錯雜して居るからである、現に日本人に就て見ると、日本人は蒙古種で黄色な皮膚で、眼は横に一直線を爲さずして幾分斜線をなす、即外眥が釣上つて居り、又内眥の裂目が通らず、鼻梁も通らない、又鬚髯が少なくて類

(十八) 或問

骨が高いなどが特徴である、けれども日本人の中にも白色で眼が横に真直で、額骨の高からぬ、鼻梁の通つた、鬚髯の多いといふものも度々見受ける、又黒奴と見まがふほど皮膚が黒くて厚く、顔が狭くて唇の厚いものもある、斯やふな譯で何れの民にも色々雜つて居るから、地理とか色とか顔面の角度とか頭髪とか頭の形とかいふものも當然人種を分ける標準には成らない、此れ學者に因て人種の區別の異なる所以である、さうして其區別も人類でなく人種の區別に過ぎないのである。

人種の區別に就ては學者に因て各違ふといふても、世界人類の中には大なる相異があるから決して一類とは認められぬ、故にウォルテールもいふた「白色人、黒色人、黄色人、赤色人の各異なる人類なることは替者を除く他決して疑ふ能はず」と。

解答、今より二百年前にあつては、動物學生物學が未だ進歩しあかつたから宗教を嫌ふウォルテール氏の如き文學者が斯る愚説を吐いても餘り耻辱でもなかつ

(十八) 人類に皮膚の色の差を生じたるは何故ぞ

六十九

(十八) 人類に皮膚の色の差を生じたるは何故ぞ
た、けれども既に二十世紀に達した今に至りて尙斯る難問をするのは餘りに已
れの無學不識を表はすもので動物學の端緒でも知つたものには笑はれべき説
である、

七十

今日に於ては皮膚の色は人種の區別とする特徴とするに足らないといふこと
は學者等一般に知られた、何せなれば皮膚の色は何に因て異ふかといふこと
が解つたからである、顯微鏡を以て人の皮膚を研究すれば、皮膚は上皮と内
皮の二より成る、さうして其上皮の下に色素を顯はす色素から成る粘膜がある、
此色素は誰れにもあるが、只人に由て濃淡赤黄の差があるのである、ソコで
概して西洋人には色は淡く膜が薄い、亞細亞人には黄色で亞非利加人には色
が濃く膜が厚いといふことだけである、人間各自にありても身体の部分に
由つて濃淡の差がある、又各自の生活に因ても差がある、農民や漁夫の如
く始終外氣と日光に曝されるものは厚く濃くなる、又室内のみに居るものは
薄く白くなる、これは人々の實見する所だ、この色素といふものは恰も漆の

やうなもので、樹から取つた時には白いが空氣や日光に曝せば追上赤くなり
後には黒くなる、色素も矢張之と同じやうな變化を受けるのだから決して之
を以て分類の眞の標準にはあらないと動物學者一般に解つたのである、尙
禽獸に就て見ると一層明かである、動物の色といふものは或一類のもので
人間の皮膚に於ける如く種々に變つたものがある、例へば西洋の雞の如く其
皮膚の白いがあり、安南の雞の如く黄色なものもあり黒いものもある、けれど
も雞は本一類だ、又牛馬狗猫などの動物も各一類であつたのが、後其色が
種々に變化したのである、

動物の色に就て舊約全書に珍い話があるから茲に容して擧げやふ(創世紀三
十章) シヤコブといふ人が其舅あるラバンに羊を飼ふ爲に雇はれた、さうし
て其報酬としては産れた羊の班紋のものを與へ班紋でないものはラバンの所
有にするといふ約束であつた、然るに此ラバンは強慾な人間だから班紋の羊
は皆別にして自分で飼ひ、シヤコブには純色の羊ばかりを飼はせた、且又シ

(十八) 人類に皮膚の色の差を生じたるは何故ぞ

七十一

(十八) 人類に皮膚の色の差を生じたるは何故ぞ

七十二

ヤコブの羊に班紋のものが産れない爲に三日路ばかり隔て居る地へ遣て飼はしたのである、斯くまでラバンは用心したがジャコブは如何なる工夫をしたかといふに、彼は其地に着いて先づ木の枝を澤山截り其枝の所々皮を剥で班紋に見えるやふにして、春季交尾期に牡羊が始終之を見るやふに水を飲池に入れて置いたのである、所が果せる哉、ジャコブは羊の群に班紋のものが澤山産れて其工夫は徒勞でなく、ジャコブは忽ち富裕に成つたといふことが書いてある、今も西洋に於て農民が白い牛を欲ければ牛小屋の壁を白く塗るといふやふな習慣が色々ある、が然し此習慣は決して愚な所作でない、却て近世の實驗學に適つて居る、之に依て見ると動物の色合などは些細な理由で差つて来る、吾人は兎角近世紀に至ては進歩した實驗學を鼻に懸けて昔の人間は智慧が浅いといふ傲慢な考を起し易いが是は眞實でない、右の舊約書の話を見ても四千年前の昔に動物の實驗が随分届いて居つたと思はれるではないか、

(十九) 或問、

猶終に當て近年蝶に就て珍しいことを發見したのを陳べやふ、それは即ち同一類の蝶でも土地の寒暖に因て色が變るといふことである、亞非利加の如き熱帯地方の蝶と英國の如き寒地の蝶とは全く別種類と思はれるは色色が違つて居る、斯やふを實驗は尙さまゝある、斯く色々の學說を以て考れば學問のないものはと解らぬことが多いから疑ひ易いが學問が有るに従つて己れの智慧の如何に頼み難いかといふことを知つて輒く非難せぬやふになる、近いへば半熟先生はと傲慢で強情なものはないと知られる。

世界人類の色の差異に就ては了解した、けれども人類には猶違ふ所が澤山ある、例へば頭髪、身長、脊骨、頭蓋の形などが人種に因て違ふ、之が解らなければ人間の類なることは信じられない。解答、人種に因て種々差異のあるといふは疑ひない、然しながら其差異は類の別でなく種の別である、

(十九) 毛髮、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ

七十三

第一、人間の頭髪と髭鬚は其色が白くても黒くても赤くても黒くても、又太くても細くても

十九) 毛髮、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ
七十四

くても真直でも縮むでも皆毛髮類に属して絨毛類に属するものは無い、却て
獸類に於ては人間と違つて同一類のものにも其毛の類を異にするのがあつた。
例へば歐羅巴亞細亞に産する羊の毛は長く細くて羅紗に織ることの出来る絨
毛類であるが亞非利加に産する羊の毛は毛髮類であつて短く太く硬くて羅紗
に織れない、又世界中何の國の猪も其毛は總ての獸類より硬い、然るに南亞
米利加のアンデス山に産する猪の毛は絨毛類であつて下等な羊毛位である、
斯く其毛に別があつても羊は羊猪は猪で各一類である、只其中に幾種
にも種が別れて居るのみだといふことを疑ふ學者は一人も無い、人間に於て
も矢張同じである、
第二、身長に就て見るに、世界中最も丈の低い人間は亞非利加南方の蠻族ボ
ツシマンである、此人種には身長が一メートル 即三尺三四寸位のものが
澤山ある、又身長之最も高いのは南亞米利加の南端あるパタゴニア人である、
此民には其丈六尺五寸位あるものも往々ある、けれども其平均の身長を見る

とボツシマン人は一メートル三十七センチメートル、パタゴニア人は一メー
トル七十二センチメートルで其差は僅に三十五センチメートルだから一尺一
寸余で最小なるボツシマン人も最大なるパタゴニア人に比べて五分の四に當
る、然るに狗などには其長僅に一尺位の小さいものあり、又歐羅巴、亞非
利加に産する山狗と名けらるゝもの、中には其丈四尺四寸に至るものがあ
る、即四倍余に當る、之を人間の身長に比べて見れば實に非常なもので
はないか、又馬の中に其最も高いのは五尺七寸あり最も低いのは二尺五寸に
過ぎないのがある即ち五分の二に當る、牛羊など皆同じである、斯くまで差
があつても狗、馬、牛羊共に皆一番より出た一類であることは疑ひない、然
らば何故に人間の如く身長に差の少ないものを一類でないといふか、
第三、人間の脊推骨の数は二十四に一定して居る時としては一つ多いものも
あるが極めて少い、獸類には其數に差のあるものがある、例へば亞非利加の
豚は其脊推骨が四十四ある、英國の豚には五十四ある、又尾は脊骨の末端で

(十九) 毛髮、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ

(十九) 毛髪、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ

あるが狗猫羊の中には尾の長いもあり、又極めて短いもある、斯くの如く脊骨に差ひがあつても同類である、其差異は類の別でなく種の別である、

第四、手足は如何、人間にありても手足の指が六本ある人も時として産れる、けれどもかやふな人間は香具師の手に渡されるほど珍しい不具者である、所が狗には其種に由て後肢の趾が四つのも或は五つのもがある、又猪は趾が二つであるが通例然るに時としては馬の如く一つの趾の種がある、

第五、頭蓋の形は如何、人間の中に其頭蓋の前後に長いのがあり、又左右に長いものあり、又圓いものもある、然し獸には人間よりも一層差ふことがある、例へば南亞米利加ブラタ國の牛と歐羅巴の牛とは其頭の形が全く違ふ、又日本の狆の頭は歐羅巴の長い尖た口の狗とは其形が全く差ふ、鶏鳩なども同じである、殊に鳩などは其種が百五十にも分れて居る、

第六、腦髓の大きさは如何、一番大きい完全な猿の腦髓を平均して其大きさは四百五十立方センチメートルであるが、最も野蠻なる種族でも人間は其腦

髓の平均が千四百立方センチメートルである、尙又世界中の人類の腦量を見るに、最も小さい腦髓を有する人種の平均は千四百立方センチメートルで一番大なる腦髓を有する人種の平均は千六百立方センチメートルで其差は僅に二百立方センチメートルである、

サチ斯く同一人類に皮膚の色、身長、形の差異即人種の別の生ずるのは食物、生活、習慣、風土、氣候などに原因するのである、然しながら其差異も他の動物に比べたならば實に些細である、決して類を別にするほどの差異でない、唯種の別であるといふことは一般學者の疑はぬ所である、殊に凡三十年前から世界中足跡の及ばぬ國は全く無い、従て比較動物學は愈進歩したから、最早今日は人間の種類に就て非難するものは學者の中には無いやうになつたのである、

(三) 或問

天主教の教える所に依ると、人間が世界に造られたのは凡そ六七千年前であるといふが、萬國の歴史、太古の遺物、地質學などを研究すれば何萬年前と

(十九) 毛髪、身長、脊骨、頭蓋に差あるは何故ぞ

(三十) 人類の地上に發現したるは數万年前の古なりとは學問の證する所なり 七十八
いふはごである、シテ見ると天主教は學說に合はない舊思想より出でた宗教
である、

解答、人間が造物主に造られたのは憶かに六七千年前だとは天主教の教へる所でない、舊約全書には其年限が明かに記してない、只元祖アダムより耶穌基督に至るまでの系圖即アダムの嫡裔ある人々の姓名及其年齢だけが記してあるのみだ、さうして其合計年數は聖書學者に由て違ふ、學者中最も短數に計算したものはアダムより基督降生までを三千四百八十三年とする、又最も長數に計算したものは六千九百八十四年としたのである、之に降生後今日までの一千九百二年を合算すれば人間が世界に造られて以來今年までは八千八百八十六年に成る、何故に斯く聖書學者に依て年數が差ふかといふに、それはアダムの子孫の年齢が明かに記してないからである、其他又學者等の考に昔は印刷術が無つたから筆記方に依つた、さうして幾度も筆寫されたが、元來筆を以て寫すことは困難なるのみならず時間を費すことが大層だ、殊に數字の如

きは最も誤寫し易いものである、是等のことから年限を一定することが出来ないのである、且又昔の先祖の中には故らに其人名を省略したのもあらうと思はれる、何せなれば昔時小亞細亞の習慣に高名な人の外は系譜中へ書かないといふこともあつた、といふことは學者等の皆素より考へた所である、シテ見ると人間が造られてから今迄何年に成るかといふことは天主教に於ては未定のことです學問上の問題である、何れでも眞に近いと思はれる計算に賛成することは各自の自由である、故に之を以て天主教を駁するのは門違である、斯く天主教に對して非難すべき問題では無いが、然し是は随分面白い問題だから少しく之に答へやふ、

第一、問者は萬國の歴史に由るといふが、支那國の如く随分古代から開けたと多くの人の思ふて居る國でも其歴史の疑はしくないのは基督降生前七百七十五年に過ぎない、其より已前は考證に乏しくて明かには分らない、支那國の歴史にある萬物の祖を盤古氏とし天皇氏地皇氏人皇氏が之に次で各一萬

(三十) 人類の地上に發現したるは數万年前の古なりきは學問の難する所なり 八十
 八千歳づゝ生きたといふこと、或は天地開闢より春秋獲麟に至るまで凡そ二
 百二十六万七千年など記してあるのは、只己れの國を古くする爲に後世に捏
 造した不稽の説で取るに足らぬ、それで支那の歴史上充分の考證が無いにも
 せよ兎に角歴史として多少信ずるに足る人の中に最も古いのは黄帝であつ
 て、これは伏羲神農と並稱して三皇といふが、然し三皇といふても黄帝前は
 少しも事跡の考へられないものだ、故に司馬遷の史記なども黄帝を以て始め
 としてある、この黄帝が基督降生前三千五百六十八年である、尤も黄帝以前
 にも支那に人間の棲息だことは明かであるが、何年前から棲息だかといふこ
 とは少しも知るに由がない、西洋の年代學者の考には支那に人間の棲息始め
 たのも必ず九千年乃至一万年より古くないとは皆思ふて居る、印度は如何に
 といふに、印度人自ら云ふ所に依れば開闢以來何百万年に成るといふ、けれ
 ども是又何の証據もない架空の説である、其考證すべきは基督降生前千年か
 千二百年に過ぎない、又最も古國と稱せられるエジプトは如何にといふに、

エジプトといふ埃及の古代の歴史家が基督降生前二百八十年に於て其國古代
 の歴史を書いた、其中にある年代は左の如くである、
 神代と稱するもの一万三千九百年
 豪傑の代と稱するもの一千二百五十五年
 王の代と稱するもの三千九百五十七年
 豪傑の靈の代と稱するもの五千八百十三年
 三十王の代と稱するもの五千年
 合計 二万九千九百二十五年
 斯やふに記してある、然しながら此種の怪談は何れの國の古代歴史にもある
 が無論研究するまでもない取るに足らない説で歴史上何の價値も有たぬ、
 第二、問者のいふ古代の遺物に就ては如何、成程古代の遺物の研究は歴史よ
 りも精確である、而し今日までに發見した遺物中最も古いのはカルデアとア
 ツシリア二ヶ國の遺物であつて、此遺物に刻てあることを研究すれば基督降
 (三十) 人類の地上に發現したるは數万年前の古なりきは學問の難する所なり 八十一

(二十) 人類の地上に發現したるは數万年前の古なりとは學問の證する所なり 八十二
生前四千年にウルシナといふ王があつたと思はれる、さうして當時既に餘程
開明に進むで居つて天文學までも随分知つたと思はれる、故に是よりも已前
に人間のあつたことは疑ひない、けれども如何様であつたか少しも分らぬ、
只如何に古いといふても何万年といふほどでなく何千年であらふとは學者等
の一般信する所である、

第三、問者のいふ地質學に就ては如何、此論の詳細なことを知るには先づ地
質學を知らなければならぬ、故に茲に簡短に地質學のことを陳べやふ、
地質學に於て第四地層と名けるものは一番後に一番上に出來た層であるが人
間の世界に棲息始めたのは此層の成り始めからだといふことは疑ひない、何
せなれば此層の始めから人間の遺骨とか或は其使用した石鏃石斧などが發見
されるからである、其より已前の第三地層の出來る時代には人間が棲だか棲
まぬか未だ分らない、是は地質學上に於ては未定の問題である、地質學者の
中に第三層の末期に已に人類があつたと思ふ學者も凡そ五分の一はある、其

他の五分の四の學者は皆な無つたと思ふて居る、然し雖も五分の一でも異説
があれば全く確定したるものとは云はれぬ、十中の十同意同見のことだけを以
て論ずるのが眞の學問である、

之に依て見れば人間が世界に棲み始めたのは第四層の初期からといふことは
疑ひない、さうしてそれは今日から見ると何年前位かといふに、地質學に於
て第四地層の成立の年數を推算するには、北亞米利加ナイアガラの如き大瀑
布の水勢の爲に穿れた河、崩れた山とか、或は海や湖水の激浪の爲に潰れた
岸、又は山の崩壊で埋没した池とか、又或は山の麓にあつた氷雪の次第に解け
去る現象などの年數を研究して之に依て計算したものである、斯やふな譯だ
から其計算は必しも精確といはれぬ、又出來やふ筈もない、それで第四地層
の初期から今日までの年數に就ては學者に因て各考が異つて居る、即ドモ
ルタイレ氏の考には二十三万年を要したといひ、フホルル氏は約十万年であ
るといひ、リエル氏は約四万年、ウバン氏は約一万年、ドラペラン氏は八千

(二十) 人類の地上に發現したるは數万年前の古なり、是は學問の證する所なり 八十四

乃至一万年、アルスラン氏は七千乃至九千年、ギルベルト氏は七千年とするの類である、斯く各其推算の區々なる所から紀元一千八百九十七年八月瑞典國フリブル府に於て地質學會を開いた時、其書記であつたブレイ氏が結論していふに、『六千年とするは慥かに不足であるが、又十万年或は二十万年とするのも確かな據がないのみならず今の實驗に因て有るらしく思はれない、然しながら爾來益々研究せば終に此論を明する時が来るであらふ』と、之に依て人間の世界に造られてからの年數は地質學上に於ては未定の問題である。

(三) 或問、

太古始めて人間の出來た時は極めて下等なもので智慧も淺く心も狭くて恰も今の野蠻人に異ならない、それが追々進歩して學問習慣道徳が開け終に今日の如く開明に至つたのである、今亞非利加、澳太刺利亞、等の國々にある蠻人は古の原人時代其進歩せず居るのであるとは一般學者の説である、之を以て見ると天主教でいふ所の人間は造物主に直接に造られたといふ説は信

じられない。

解答、

此難問者の説は大に流行したもので學者の中にも之を贊成するものが随分ある、社會進化論者は専ら此説を主張して人間の体が下等動物から進化した如く其智慧も動物の如き下等なものから追々進歩して今日の如くなつたのであるといふのだ、これは取りも直さず原人の智慧は進化し始めた動物の智慧である、今の野蠻人も原人だから進化し始めた動物の智慧であるといふに同じだ、換言は原人或は今の野蠻人は未だ完全の人間に成らない、動物と人間との中間に位するものだといふのである、斯る説が果して眞であらふか、實際それに相違ないだらふか、吾人は今宗教に因らずして只學問と論理とに因て研究して見たい、

元來進化論者のいふ所は彼等自らが獨斷的に決めたもので何の証據もない、証據のあひことは臆説であつて決して學問と見做すことの出來ないものである、公平に檢察れば此説は何うしても實驗學に合はない、如何なる野蠻人で

(三十一) 原人の野蠻なり故に人祖と稱に造られたりさいふよりは 八十五
動物より進化したりさいふ方眞に近し

(三十一)

原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは、動物より進化したりといふ方に近し

八十六

も生れた子供は之に教育を施すことが出来る、例へばアフリカに於て黒奴を教育する爲に西洋人の建てた學校がある、さうして彼の學校に於て黒奴ある生徒は概して伶俐である、又其中に稀には西洋人の普通の生徒よりも早く學問に上達するものもある、之は今の野蠻人の智慧も矢張西洋人の智慧と全く同一で異つたことはないといふことを立派に証明するものではないか、若し彼進化論者のいふ如く野蠻人が原人にして動物と相距る一步なるもの、未だ人間に至らざるものであるならば、斯く野蠻人の子供が一足飛に開明人になり得るといふことは無い筈である、尙又一層深く研究すれば今の野蠻人は充全智慧のない原人では無く却て開明人の退歩したる遺裔である、昔時随分開明であつた民が何かの因由で衰退て野蠻に成つたといはねばならぬ、其故如何といふに、完全なる言語を有するは開明人の徴であることは疑ひない定論である、始めより野蠻なる民は決して完全なる言語を有する筈が無い、然るに世界中最劣等なる蠻民は澳西太利亞の土人であるとは總ての人類學者の

認むる所であるのに言語だけは完全して居る、此蠻族は身長甚だ低く、額が狭く、口が尖り、頭蓋骨は厚く、又其使用道具は石器のみである、彼等には弓の如き簡單なる武器さへも有たぬ、又彼等の用ひる樂器は極めて下等な太鼓と鼻を以て吹く詰らぬ笛のみだ、實にアフリカの黒奴よりも一層劣つて居る蠻人である、然るにも保らず彼等の用ひる言語は驚くほど高尚且完全して居る、其字引や文法は實に立派なものである、一例を擧げて見んに、彼等の用ひる言語には名詞の變化が七種あつて其各に十づゝの格がある、拉丁語には變化の種類は五で其各に六つゝの格があるのみだ、日本語には名詞の變化といふものは無いが天爾遠波といふものがあつて之を補ふて居る、又彼等の言語に於て動詞の變化は佛語よりも多い、其他接頭語接尾語といふものがなかく澤山ある、(接頭語とは日本語に於ては新嫁、新枕、新壘、或は眞白、眞心、眞中などの新、眞の類で接尾語とは悪げ、重げ、悲げなどのげの類である)右は一例に過ぎないが兎に角かやふな譯だから彼等は如何なる

(三十二)

原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは、動物より進化したりといふ方に近し

八十七

(三十一)

原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは動物より進化したりといふ方に近し

八十八

徹細な復雜な意味をも明かに言ひ表はすことが出来る、斯る完全な語は開明國にも多くは無い、日本語もよりは餘程完備した又明確な語である、然るに現今の澳太刺利人の状態から見れば斯くまで完全な語は不必要である、彼等の生活、動作には不權衡で立派すぎる語だ、之に依て見ると彼等の祖先が開明人であつたが次第に衰退して今の状態に至つたのか、或は漂流とか其他何かの事情に因て分れた民であるといふ確な證據である、獨り埃太刺利人のみでない他の野蠻人も矢張同じで、亞米利加の北方ティンチといふ野蠻人も埃太刺利人の如く其用ひる言語は完全である、ドナダイラック氏はいふ、『斯やふな言語を發明した民は必ず智識の進歩した民であつたに相違ない』、サラス實際の經驗に因て立てた論を證據の無い臆説なる進化論に比べて何れが眞實だらうか、いふまでもなく今の野蠻人は決して原人でなく開明人の退歩したのである、宛も截つた枝が幹に離れて枯れたやふなものだといふことは何より明かではないか、

次に論者のいふが如く原人は果して野蠻であつたものか否といふことを研究したい、然しながら之は實驗學を以てすることの出来ないものだ、何せなれば八九千年若くは一万年前の人間に就ては其遺跡が何一つない、又其建築、用具、動作の残つたものもなく、其用ひた語さへも分らぬ、故に之を研究するには宗教に依るか論理に依るか此二つの外道がないのである、さうして總ての宗教の中天主教の經典なる舊約全書の他の原人の事を悉く記してあるものがないが、其創世紀にある所を見るにアダムといふ元祖は完全な人間であつたのみならず造物主より深い智慧を賦へられたといふことは其周邊にある所の多くの動物に悉く其性質に適當なる名を附けたといふを見ても知られる、性質に適當なる名を附けるには是非とも動物の性質を能く辨へなければならぬ、これを辨へるといふは即是れ學問である、次に論理を以て考へるに、人間は進化論者のいふ如く動物より進化したもので完全な猿といふに過ぎないか、或は宗教のいふ如く始めに於て完全な

(三十一)

原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは動物より進化したりといふ方に近し

八十九

(三十二) 原人は野蠻なり故に人祖は神に造られたりといふよりは動物より進化したりといふ方に近し

のに造られたかといふ二つの他はないのである、ソコで進化説のいふ所は第十五の解答にもある通り悉く臆説假定であつて實驗にも生理にも人間の性質にも合はぬ論だから無論取るに足らぬ、既に進化説が信するに足らないならば何うしても人間は造物主に直接に造られたといふ説を信じなければならぬ、斯く造物主に造られたものならば従て完全であつたといふことも信じなければならぬ、悉くいへば人性に適當なる力、徳、智慧、意志、などを具へて居つたに相違ないのである、且又人間は只是等の能力を賦へられたといふことだけで既に知つたこと覺つたことが無く突如に此世界に出されたならば生存が出来ない忽ち死ぬるより外はないのである、故に生存の爲に必要なことは皆造られた時に知つて居つたといふことは疑ひない、造物主は全能であるから何うしても生存し繁殖する爲に必要な恩恵即健康ある肉体と、明かな智慧、堅固な意志などを賦へなければならぬ、故にいふ原人は野蠻でよく却て開明であつた也。

(三) 或問

世界萬物が原罪の爲に潰れたといふことは舊約全書に録してある他何の証據もない、開闢已來世の終に至るまでの敍知れない多くの人間悉く一人の罪の爲に潰れるといふやふ愚説は何うしても信じられない。

解答

世界萬物の古代史に通せぬ人は原罪の証據は舊約全書に録してある他に無いと思ふだらふ、然しながら深く研究すれば其他にも証據は澤山ある、先此原罪説は少數の人或は一ニヶ國のみに信じられた説でないといふことは天主教を嫌つたヴォルテールの著した道徳論第四章に「人類が潰れたといふ説は往古の民の悉く信する所である」と、書いたのを看ても証明される、が猶茲に各國の古代傳説を挙げやふ、

第一は猶太の民である、猶太に於ては此原罪説がモイゼス教の基礎であつた、然しながら是は造物主を信じて居る民であるから別として他の僞神教なる各國は何うであらふ、希臘のホメールと同時代の詩人ヘシオドはいふ「エビメラーといふ人間の大きな不注意に因て一般人間は大きな苦難を受くべきもの

(二十二) 世界万物原罪に漬れたりといふは信じ難し

と成つた、彼は神より人類中初めて妻を興へられた人である、然れども其妻は人類の爲に美しい悪であつた、大害なる美術であつた」と又ホメールはいふ「神の王ジユピタルに造られた始めての人間はアテである、而て彼は神に背いた世界に艱難の生じたるは其罰である」と、

斯やうな説は希臘に幾つもあるが皆これと大同小異である、

次ぎに羅馬の詩人オヴィド、ヴィルグルなどは其書に記していふ「人祖の時代は黄金時代で極めて幸福な世界であつたが、後に罰の爲に大なる禍難を下された、之今の鉄時代である」と、又いふ「バンドルは世に珍しき美人であつた、而て彼は天より寶篋を賜はり之を開くことを禁じられた、然るに彼は其の中を看たく思ふて終に其蓋を取つた、所がありとあらゆる難儀災禍は其篋より出て世界中に流れた、彼は驚き倉皇て之を閉ぢ僅かに望みといふ幸福だけを遺すことが出来た」と、又プロメテといふ人が天より火を偷ひた、彼は其罰として巖上に縛られて絶えず鷹に啄かれて居る、さうして其鷹は半身蛇

なる女より産れた」と、

斯る古代の傳説は何れも不稽の造談で取るに足らない、然しながら其説の起原其真正の意味如何を深く探究たならば人間の最初に於ては幸福なものであつたか其後罪の爲に不幸な世に成つたといふことの傳から出たであらうといふことは畧承知されるのである、右は詩人の書いたのであるが哲學者も矢張り同様なことを書いた、即プラトンは其書ティメに記していふ「人間は造られて後間も亦く其情も能力も變つて人類の頭なるものが腐敗した」と、ピタゴラはいふ「屍が墓に埋まるが如く靈魂は肉体に埋まる、是れ或罪の罰である」と、シセロはいふ「現世の總ての艱難不幸は前に犯した大罪の償であるといふことを余は承認する」と、是等の哲學者も亦た希臘羅馬の人々である、次ぎに此二ヶ國の他は何うであらう、

波斯亞の最古の書ゼンド、アベスタに曰く「人祖の男をメッシアといひ女をメッシアナといふ、此二人はオルムベといふ神に造られたと云つて潔きも

(二十二) 世界万物原罪に漬れたりといふは信じ難し

(二十二) 世界万物原罪に渡れたりといふは信じ難し

のであつた、然るに魔神マリマキは彼等を嫉んで之を誘惑ために蝮蛇の形を借りて顯はれ、彼等に果實を興へて欺いた、之が爲に彼等の性は腐敗し、又其腐敗は彼等の子孫にまで傳はつた』と、埃及の傳説にいふ、『ティフホンといふ蛇の工夫で世界中海陸共に種々なる不幸を受けた』と、

印度の傳説にいふ、『半身蛇なるカリリーといふ女の爲に世上の萬物は罰されたが、之を救ふ爲にヴィカヌといふ天神が降つた』と、

日本に於てはイザナギの尊がイザナメの尊を慕ふて夜見の國に入り穢を帶て歸つたといふ話がある、

又支那傳來の文字なるむさぼるとさんするの二字か何れも二個の木の字に女と示といふ字を添えてある、即 婪、禁の二字であるが之等は如何なる譯であらうか、元來元祖アダム、エワが樂園に置かれたときには生命の樹と善惡の樹と名づけられた二つの樹があつて生命の樹の果は之を食することを許さ

れてあつたが、善惡の樹の果は之を食することを禁じられてあつた、然るに惡魔は蛇の形を以て顯はれ女なるエワに其禁じられた樹の果を食するやふに勸めたといふのである、之に因て二個の木の字と女と示といふ文字を合せ禁する婪ると訓する字に成るのは或は其字原が原罪に關係あることでは無からふかと思はれる、然し未だ字原を深く研究したのでないから暫らく疑ひとして擧げて置くのである、

蒙古の傳説にいふ、『人祖は始め幸福であつたが、後彼は雪の如く其色白き砂糖の如く其味甘きシメといふ草を食べた罪の爲に禍難を得た』と、

又墨西哥に於ては始めの女を肉体の母と名けて、其画像を画くときには必ず蛇を其傍に添えた、

以上の如く世界各国に種々なる古傳があるが何れも荒唐不稽の説で信するに足らない、けれども吾人は其意味のある所を探つて見るに此種々の説に一致契合する點を見出すのである、即ち何れも皆な人祖の罪に因て現世が罰され

(二十三) 世界万物原罪に渡れたりといふは信じ難し

(三十三) 世界万物原罪に染れたりといふは信じ難し

たものたといふことは同じである。是は實に奇異なること、いはなければあ
らぬ、キエツエー氏はいふた、「斯る奇異なる一致を以て單に偶然の契合と見る
ことは出来ない、言語、宗教、習慣を異にし、又相交通せざる國々に於て皆
同様奇説を爲すといふは、其起原が實際に有つたことでなければ決して有り
得べからざることである」と、又哲學者マルブランシ・氏はいふ、「古代に於
て世界の民が太陽を神として拜むたといふことは愚なる所作といふても吾人
は之を解することが出来る、何せなれば太陽は日々吾人を照すがゆゑに、然
れども人類の不幸難儀が蛇より來るといふことを信じたるは其何故あるかを
知るに困む、何せなれば蛇と難儀不幸とは何の關係もなきことなるがゆゑ
に」と、

(三) 或問、

之に依て見ると原罪の説は舊約全書に記してあるのみでない、世界萬國の古
代の傳へには曖昧ながら遺つて居るといふことは証するに足るのである。
罪とは知りつゝ、神命に背くことである、然るに原罪の如き己れの全く興り知
らざる罪に因て罰されねばならぬといふは無理な話である。

解答、

如何にも問者のいふ所は至當である、吾人も問者の説に賛成するのである、
今日の淺薄な智慧の曉つた道理に依れば知らない罪の罰を受ける筈がないと
思ふのは當然だ、吾人も其理由は明かに解らぬ、何せなれば是は大なる玄義
であるから、故に之に就ては只左の如く答へるより他に道がない、即パスカ
ル氏がいふた通り原罪説は如何にも大なる玄義であるが、然し此説を除いて
は人類の今日の状態は一層深き玄義となつて之を了解することが出来ないだ
らう、細言すれば原罪説に依れば人生の難儀不幸、現世の状態、及其紛擾、
混乱、罪惡等のある所以を理解せられる、若し原罪説を排けたならば吾人は
何を以て現世のことを解くか、一も分ることが出来なくあると、

凡そ或物、或行、或規則が道理であるか、不道理であるかを判断には先づ
其物、其行、其規則の詳細な事情、成立、趣意などを知らなければ出来ない
ことだ、然るに往古と今日とは總てのことが大に異つて居る、故に今日を以

(三十三) 原罪の如き自己の明知せざる罪に因て罰せらるゝは非理也甚し

二十三 原罪の如き自己の關知せざる罪に因て罰さるゝは非理も甚し

て往古を律てはならぬ、今の人間を以て元祖を判断してはならぬ、元祖ア
ムの造られたときは罪のない潔白無垢のものであつた、故に肉にも心にも振
れたこと邪なことは更に無つた、換言はアダムは造物主の關係は今の神人の
關係と違ふ、元祖時代の世界の状態は今と全然違ふ、然しながら造物主とア
ダムの關係は何らいふやふであつたか、アダムの受けた恩寵は何の位であつ
たか、其造物主に對しての義務は如何、若しもアダムが罪を犯せばそれは如
何に重いか、又アダムは人類の頭であつて手足なる子孫との關係權利は何ら
であるか、猶又無邊なる造物主の大なる權利、其全智全善は何んなである
か、などのことは舊約全書に詳細に書いてないから吾人は知ることが出來な
い、且又原罪の犯し方なども明細に記しては無いのである、彼が置かれたと
いふ樂園は何である、其中にあつた二つの生命の樹、善惡の樹とは何か、エ
ワを誘ふたといふ蛇は實際の蛇に魔鬼が憑たのか、或は魔鬼が蛇の形を以て
顯はれたのか、或は蛇といふのは單魔鬼を表する語だけであるのが、是等は

二十三 原罪の如き自己の關知せざる罪に因て罰さるゝは非理も甚し

聖書に明記してないから聖書學者中にも色々議論があつて解らない、斯く不
明なことは之を道理とし彼を不道理とすることの出來ないものである、殊に
創世紀の始めに録されたことは原罪の話のみでない、其他開闢の時の状態を
種々書いてある、さうして世界万物が六紀に造られたといふこと及其順序
などは全く近世の地質學が証明する所と符合して居り、又光が太陽よりも前
に造られたといふことは天文学の証明する所に符合して居り、其他人間の一
類なること、開闢當時の人間の長壽あること、及大洪水のことなど悉く近世
科學に一致して居る、斯く創世紀に録してある種々なことが悉く學說に一致
して疑ひないのに獨り原罪に關する二事のみ虚偽の説と何うしていはれやふ
か、學問上から研究すれば大洪水前後の世界の狀態は著しく相違して居ると
いふ、地上の現象、草木、禽獸、人間に至るまで大層に衰弱したといふ、斯
く變化する世界が何うしてアダム時代には變化のあるべき譯がきいといふ
か、吾人は何う考へても原罪説は玄義であるといふても是が眞でないならば

(二十三) 原罪の如き自己の闕知せざる罪に因て罰さるゝは非理し甚し
百
今の世界が解らないのである、世界に暴風、大雨、震災、海嘯などの大なる
物質現象のあることも、人間の心が生れながら悪に傾向して居ることも、其肉
体に病難苦死あることも、社會に紛亂争擾あることも、解らぬのである、世
界に斯る逆戻な混乱の生じたのは何か其原因が無ければならぬ、斯ることは
全智全善なる造物主が理由なく出す筈がない、何うでも有限なる不完全なる
ものが自ら招いたものに相違ない、故にアダムが犯した罪より出さないとすれ
ば何より出たであらうか、

猶又吾人々間には義の如何なるものかは随分明つたといふても全く曉つたど
は云れぬ、義を全く曉るは造物主の全智のみである、故に聖書にも「造物主
の考と人間の考とは往々齟齬して、人間の道理とすることを造物主は却て不道
理とし給ふ」と記してある、されば吾人は決して知らぬ罪に罰される道理は
ない義に背くといはれないものだ、既に世界の法律習慣にも己れの犯さ
るる罪に就て罰される例は澤山あり人も之を怪しまないではないか、委しく

は真理の本原第二篇に陳べてあるが例へば親の犯した罪の爲に關係ない子孫
が辱を受けるとか、父祖の破産の爲に子孫が負に陥るとか、或は嫡居流罪の
刑人の子孫が其地に生育などの類は人々皆當然のこととして訝るものにな
い、然らば何故獨り人類の頭なるアダムが罪の爲に生じた結果が其子孫に傳
はることのみ之と同じでないといふか、不道理とするのであるか。

(二) 或問、
人類は原罪の漬れを受けて悪を犯すやふになつたといふ、然らば罪を造物主
は人間を改造た方がよいではないか。

解答、
人間を改造た方が可いといふのは取も直さず造物主が人間を改造ないのは誤
であるといふに同じである、有限なる吾人の智慧を以て無限なる造物主の智
恵でなし給ふことに添削を入れるといふは笑ふに堪へた傲慢先生である、左
様な考をする問者自身は若し己れの家が古びたり潰れたりしたならば直に潰
して造替へるであらうか、或は美術家が己れの作したものが汚れたといふて
直に改造たらうか、決してソナナことはせないだらう、今假りに問者のいふ

(二十四) 何故神は渡したる人間を改造せざりしや

如く人間を改造せしめた所で矢張アダムアダムの如く自由を具へたものでなければならぬ、さうしたならば其改造した人間が果してアダムアダムの如く罪を犯すやうなことはせぬと保証し得らるゝか、決して出来ないであらふ、若又決して罪を犯さぬやうに造るならばそれは自由のない人間であるから器械的生物である、されば吾人吾人でさへも何う考へても改造の必要は無いではないか、殊に吾人の如き淺い智の人間が神の所作に對して彼是考へる所以がない、全智なる造物主の聖慮であるから改造しないのが最も可いといはねばならぬ。

(三) 或問、

造物主は人祖を試みる爲に樹果を食へるなどいふやうな語らぬことを掟にしたといふが、何故モ少し高尚なことを以て試みなかつたか。如何様な掟を定めて人祖を試みたとしても何か理窟はいへるのである、造物主は最も守り易い命令を以て人祖を試み給ふたのに、それでさへ最早問者の如くヤ高尚でないとか、積らぬとか、兒戯に類するとかいふではないか、故に若しも之に反して守り難いやふな高尚なことを以て試みたならば問者の如き

解答、

人は必ず是は厭制であるとか残酷であるとか無理に罪に墮すやふなものだなどいふであらふ、前掲の第二十三の解答にも陳べた通り人祖を試み給ふたといふことも舊約全書には幾か録してある計りである、故に儲かには解らない、神の禁じ給ふたことは全く何であつたか知れない、聖書には善惡の樹果を食へることを禁じたと書いてある、けれども善惡の樹とは何であるか、或は寓言であるのか、實際のものか、少しも解らぬ、此故に聖書學者の中に彼の樹といふ語は惡を爲すなどいふ意を表する比喩だと思ふものも随分ある、吾人は左様な考には贊成もせぬが然し又不贊成もせぬ、吾人は唯信する、造物主が人間を試みる爲に何事をか禁じ給ふたといふことを、其禁じたことは實際何であるかを知るものはないから之に就ては理窟をいふべき筋でないのである、又吾人は其實際の何たるを知らねばならぬといふ必要がない、而し之に就て疑ひないことは二つある、一は造物主は全智であるから決して兒戯に類すること積らぬこ

(二十五) 何故神は兒戯に類する掟を以て人祖を試みしや

何故神は兒戯に類する掟を以て人祖を試みしや

(二十五) 何故神は兇賊に類する操み以て人祖を試みしや

百四

とを禁じたでないといふこと、二は造物主は人間の親にして其憐は無限だから決して人間に守り難いやふなことを命じなかつたといふ二つである、ソコで若しも人が何故原罪のことを明かに舊約に記さなかつたか、何故造物主は萬民の罰される所以を確りと啓示なされなかつたかと問ふならば之に對しては造物主の御自由で聖意であるといふの外答へる語はない、元來舊約全書の總ての啓示の中に人間の好奇心を満足させる爲めのやふなこととは一もない、唯人間が造られた目的即 死後の救靈を得る爲に必要なことのみである、さうして吾人が死後の救靈を得る爲には元祖が人類の頭だから其造物主の命令に背いた罪の瀆と罰が子孫なる吾人に傳はつたといふことだけ知れれば可い、元祖が如何なる行で造物主に背いたか、如何なる命令を守らなかつたかなどいふことは死後の救靈の爲に知らなければならぬといふ必要が無い、それで造物主は啓示なされないのである。

(三) 或問、

靈魂は肉体と共に親から傳はるものか、或は又神から各自が賦へられるものか、若しも神から賦へらるゝならば原罪の傳はる所以が解らない。

解答、靈魂が各自造物主から賦へられるといふに就ては天主教の學者の中に多少異論はある、けれども今日に於ては最早定まつたことで疑ひない、然らば何故靈魂が原罪に瀆れるかといふに、これは先人性を以て考へなければならぬ、前掲第三の解答に陳べた通り、人間といふものは靈魂と肉体とが單に合併したといふものでない、二つのものが合して別に新たな人間といふ一つのものになつたのである、故に靈魂と肉体とは非常な密接な關係を爲して靈魂の働、善、惡、瀆は總て肉体に及び、肉体の働、行、瀆、一切亦た靈魂に及ぶのである、只異なる所は肉体に傳はる原罪の瀆は血統を以て直接に傳はり、靈魂の受ける原罪の瀆は人性に因て傳はるので間接であるといふ違ひだ、換言

ば肉体は元祖より眞直に瀆を受け、靈魂は肉体から瀆を受けるのである、毎度いふことであるが親から受けるものは肉体であるが親から生れるものは人間である、さうして人間は生きて居る間其靈魂と肉体とは分れることの出來

(二十六) 靈魂は各自神より賦へらるゝといふ然らば原罪に瀆らるゝ所以なし 百五

(二十七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を視ず。

ない性質である、故に半ば償れ半ば償れないといふことは其性質に因て出来
ない、若しも左様あるものがあればそれは人間でなくて不思議な怪物である。

(三) 或問、

解答、

善惡の賞罰は悉く現世にある、別に來世の賞罰があるとは思はれない。
これは靈魂は不滅でない、禽獸の靈魂の如く死ぬと同時に消えて仕舞といふ
に同じだ、然しながら靈魂の不滅あることは善惡賞罰のみでなく他に澤山の
証據のあることだから、問者は斯る近眼的難問を以て靈魂の不滅なることを
打消すことは到底も出来ない、又問者は善惡の賞罰が悉く現世にあるといふ
が、何うして左様に観えるか、吾人の眼からは却て反對に観るのである、
成程幾分は現世にも賞罰がある、吾人も其は疑はぬ、けれども其賞罰たる甚
だ不充分で決して之を以て満足に思はれぬ、問者はいふであらう、現在に賞
罰がなくとも惡事は何時か世に顯はれ惡評は世間に傳はり或は歴史に汚名を
流す、善事も矢張同じである、終には世に知られ美名を千載に輝かすと、シ
テ見ると問者は現世の毀譽褒貶を以て終極の制裁とするのである、善惡の應

報は全く死後の毀譽後世の褒貶に因て定まるといふのである、嗚呼此の如く
考ふる人は如何に容易く満足し得らるゝ人ではあるぞ、

先づ死後の毀譽といふが、後世の人から彼是評さるゝは世の人には世間果して
幾人あるぞ、却て何の評判も何の褒貶をも受けない人が千中の九百九十九
りも多いではないか、近く日清戦役に觀よ、國家の爲め砲煙彈雨の中に愛國
的戦死を遂げたものは何千であらう、然れども彼等名譽戦死者の中に其美名
が世に傳はり後世に遺るものが果して何人あるぞ、殊に知らずや世評は浮い
たる雲の如くで、人の噂も七十五日てふ諺に漏れず忽ちにして起るかと思へ
ば倏にして消ゆる、日本開國以來死だ人間は億兆を以ても數へられない、而
て是等の中に美名なれ醜名なれ二十世紀の今日まで傳つたものは果して何人
あるか、問者よ試に人々の一家に考へよ、僅かに數代前の祖先の名は忘れ
るものが多いではないか、祖父の名さへも記憶せぬ人すらあるではないか、
曾祖父に至ては其名を知るもの皆無ともいはれる、況や其行に於てをや、

(二十七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を視ず

(二十七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を顯す

況や他人の祖先に於てをやである、之を以て見るときは世評をいふこと
 は死者の爲に何の慰めにも何の苦みにも値あるものでない、尙又問者のいふ
 が如く靈魂は果して不滅でないならば、人間は死と共に全く消えて仕舞ので
 ある、無いもの、爲に何うして賞罰があるか、賞罰共に彼の爲には何の痛痒
 も感じないではないか、虚無に戻つたものが賞罰を受けるといふ是よりも撞
 着のことはあるまい、左様な考を爲す人は賞罰の意味までも知らないものだ、
 本來賞とは幸福或は快樂或は歡喜と同じく、罰とは不幸、或は苦痛或は悲歎
 と同じである、此の禍福、苦樂、悲喜を離れては決して賞罰はないのである、
 消滅したものの虚無のものは考へる感じも無い故に何うして賞罰を受けられや
 ふ、かゝる難問は餘りに淺薄て意味までも無いものだ、故に若しも問者が天
 主教の未來賞罰説を駁するならば寧ろ善惡應報は現世生存中にあるといふが
 可い、之に就ては様々な理窟が云はれる、何せなれば現世に於ても正直にし
 て幸福なものあり不正直にして不幸なものもあるからである、吾人も亦た現

(二十七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を顯す

世に賞罰が少しもないとは云はぬ、儘かに有ることもある、なれども疑ひな
 いことは現世に賞罰を受けない人が多いいふこと(一)、現世の賞罰は不完
 全だといふこと(二)、若し現世のみにして未來の賞罰が無いならば善惡の賞
 罰は不義不道理のことが多いいふこと(三)此の三つである、
 (一)現世に賞罰を受けないものが多いといふは少しく世の有様を觀たならば明
 かである、生涯正直にして聊も他人を害せぬもので死ぬまで病身とか、貧
 乏とか、悪人の爲に責められて居るものが澤山ある、又道の爲とか義の爲と
 か神の爲などに命を捨てたものも澤山ある、又人殺、放火、偷盜、奸淫など
 を爲た悪人で何の罰も受けず死ぬものも澤山ある、是等は例を擧げるまでも
 ない、さうして彼等の爲には賞も罰も無つたといふは明かであいか、
 (二)現世の賞罰は不完全である、何せなれば現世に於ては如何なる幸福も満足
 を得られないから、假んば世界の寶を一手に握つたとしても未だ不足に思ふ
 が人情である、近いいへば人間の欲望は餘りに廣く現世の幸福は餘りに狭い

(二十七) 善惡の應報は現世にあり未來賞罰の必要を視ず

のである、尙又一層高尚に考へれば傲慢、邪淫、貪慾を抑へ謙遜に貞操に清貧に身を終るの行は實に高尚であつて形而上的善行である、斯る形而上的高尚な善行に報ゆるには世界の形而下的幸福快樂は下等に過ぎて不釣合である、不完全なものである、罰も矢張同じだ、惡しき書物卑猥なる小説などを著作して何千何万の人心を感し激した惡行に縁か現世の貧苦病難の如き世の評判の如き罰を以て何うして完全に報ゆることが出来やふか、金錢を得る爲に娘を賣るやうな非道な親、主親を殺すやうな不孝不忠のもの、淫を濫ぐを譽れとする不義な人間、かやふなものに報ゆる爲には現世の如何なる不幸難儀も逆も足りないではないか、

(三) 此故に若しも全く義に適ふの未來の賞罰が無いとしたならば、實に現世は不義不道理といはねばならぬではないか、裁判官は人間である故に擬律に間違が往々ある、若しも無罪を有罪としたならば、これは不義の罰ではないか、世に産れ出でるか否や大病に罹り苦みを以て死ぬ子供もある、此の子供

の爲には附のみで賞が無いではないか、斯る類は世に何程あるか知れぬ、故に若しも來世が無いならば現世は實に紛亂混雜のみで少も秩序が無いのである、少しも解ることが出来ないものである、之に反して果して來世が有るならば現世は實に逆旅の如く暫時人間の夢を結ぶ假の世である、眞の賞罰を受けるところでなくて試験され場所である、故に現世の逆さな有様、不義不道理な様子を視ても、驚くこともなく解からぬこと無いのである、近くいへば今世と來世は反對である、今世のことは來世に轉覆へるのである、主基督の金言なる『後なるものは前なるべし』といふことが知らるゝのである。

(元) 或問、天國の幸福を望み地獄の苦罰を懼れて道徳を守るといふは高尚でない、然るに天主教は此未來の賞罰を説く故に其道徳は下等と云はねばならぬ。

解答、此難問は天主教で如何に教ゆるかといふことを知つたならば自ら解るのである、天主教に於て善といふのは全善なる全美なる造物主を愛して之に従ふといふことである、換言は善の本は造物主を愛するのである、故に全く此愛に

(二十八) 未來の役割を目的とする道徳は下等なり
 基かぬ行ならば極く不完全極く下等であつて善といはれぬは必である、從て
 天國の幸福を受ける爲には何の益をもなさぬのである、さうして所謂天國の
 幸福とは何であるか、吾人が造物主の全智の幾分を曉り、又其無限なる美を
 視て益深く造物主を愛し、吾人は亦た造物主に愛されることである、之に出
 て觀ると吾人が天國の幸福を望むといふは畢竟完全なる善を望むといふに同
 じである、斯やふな心を以て道徳を守るのが何せ高尚であるまいか、換言は
 今世に於て道徳を守り來世に於て全善なる神に合併したいといふに同じであ
 る、神に合併したいといふのは全善になりたいたと望むに同じで之よりも高
 尚な道徳は無いではないか、
 若又天國の幸福を得たいといふ望みが無くて、唯地獄の苦罰のみを懼れて道
 徳を守るならば、それは眞に下等なるのみならず、其怖れる所の地獄を遁れ
 る爲に何にもならないのである、何せならば神を愛するより出ない道徳は自
 愛の道徳で眞の道徳でないからである、

斯やうに教える天主教の道徳は決して高尚でないといはれぬであらふ、天
 主教の道徳は神を愛するより出るのであるから完全なる善に向て進むの道徳
 で決して底止る所がない、吾人は此道徳を守るに從つて神に一步づ、近寄る
 のである、然しながら神は全善にして如何に吾人が道徳を守るとも之に達す
 ることは出来ない、益々進むで守らなければならぬ、故に聖書に基いて立て
 た規則に『善なるものは益善なるべく潔きものは益潔くなるべし』と
 ある、是でも尙問者は天主教の道徳を下等といふか。
 (元或問、眞の神を知らなくても一生涯善徳を積むならば助ることが出来ねばならぬ。』
 解答、前にも陳べた通り眞正の善徳といふは全善なる神を愛し之に從ふといふこと
 である、故に眞の神を知らずしては何うして之を愛し之に從ふことが出来や
 ふか、自分の親を知らない捨兒は何うして親孝行が出来やふか、眞の神を知
 らずして眞正の善徳を積むことが出来ないといふは之を以ても明かである、』
 問者はいふであらふ、生涯正直な心を以て行を正しく、他人に損を掛けず
 (二十九) 神を知らざるも善行を爲すものは助けを得べきなり

(二十九) 神を知らざるも善行を爲すものは助けを得べきなり

貧者を憐み世人が感ずるは益な善良な行をするものは善人であらふ、若し是が善人でないならば悪人であるか、若し此人が助からないといふならば悪人と同じである左やふな規則を立てる天主教は無理である。

然しながら問者よ、深く事物を論究するには感情のみを以て考へてはならぬ、感情を標準として論ずるは不道理である吾人は唯だ論理を以て考へるの外ないといふことを承知せねばならぬ、ソコで論理に因て見れば善とは何であるか、凡ての物に對して盡すべき義務を盡すといふことである、さうして凡ての物は之を三つに分けられる、即第一は萬物人間の本来なる造物主、第二は己、第三は他人の三つである、吾人が此三つのものに對しては其關係が各違ふから従て義務も違ふ、造物主は吾人に肉体も靈魂も賦へ給ふた御者であるから之に對しては拜禮、感謝し又之を愛するの義務がある、又己に對しては其肉体も靈魂も濟さぬやふにするといふ義務がある、他人に對しては他人を己の如く愛する、即己の好む所は之を人にも與へ、己の欲せざる所は之を

人にも施さぬやうにするといふ義務がある、此三つの者を總稱して善といふのである、

さうして此三つの中に何れが一番大切かといへば一番貴いものに對しての義務であることはいふまでも無い、ソコで造物主と己と他人との中で造物主は無邊であるから己と他人の如き有限物に比べて其貴いことは云はれぬは益である、故に一番大切な義務は造物主に對するものである、之は眞の論理であるから決していひ黒めることは出来ない規則である、此規則に由て見ると己と他人のみに對して如何は必心配して義務を盡しても造物主に對して有か無かさへ知らず、況して之に對する義務などといふことを思ひまでも起さぬといふやふに不心配なものが善人といはれやふか、勿論さやふな人でも己と他人に對して過ちがなければ其だけは善行といはれるが造物主に對しては不忠不義の罪人たるは免れないのである、換言は斯やふ善は不具な善である、第一の義務に背いて第二の義務だけを守つたのである、斯やふな人が助かるべ

(二十九) 神を知らざるも善行を爲すものは助けを得べきなり

(三十) 天國に在る靈魂が地獄の苦罰を視て其福樂を傷けざるや
 答 等たらふか、毎度いふ所だが、助かるとは死後造物主より大なる賞終りな
 き幸を受けて造物主に深く愛されることである、シテ見ると生涯造物主に背
 き、之に對して聊かも心配しなかつたものが何うして助かりを得られる所以か
 わらふか、問者よ若しも問者を賤むで度外に置くやふな人を愛するか、仇を
 愛し怨みに報ゆるに徳を以てするのは神の道を守るの心があつて爲すから勝
 れた善行である、若しも頼る所がなく左様な義に背く行をするのは顛狂の
 沙汰である、造物主に對して斯る顛狂の所作を望むとは甚しいものである、
 問者よ、無宗教なるも天を敬へ無邊なる造物主を敬へ、死は宗教家無宗教家
 の別なく手を其首に懸けん、呼吸ある間悔いることも悔むることも出来る、
 吾人は現世に知ることの出来ない過ちは死後明かに知ることが出来るやふに
 道理なる罰を受けん、其時に當つては唯大なる悲、慄、怖あるのみなるぞ、
 天國に往つた靈魂に地獄の苦罰が見えるか、若し見ゆるならば天國の福樂を
 幾分傷けると思ふ、何せなれば人の難儀を見て悦ぶことは出来ない同情の爲

(三) 或問

に悲みな心を起すであらふから。

解答、天國に於ける靈魂に地獄の苦罰が見ゆるか見えぬかは分らぬ、聖書にも何の
 記してあることもなく又造物主の啓示もない、けれども今假りに見ゆるとし
 ても之が爲に天國の福樂を傷けるといふ理由は無、問者は斯やふなことを
 論ずるに現世に於ける人間の感情を以て論ずるから正鵠を得ないのである、
 出来るだけ天國に於ける人の心を以て考へなければならぬ、吾人々間の感情
 といふものは現世と來世とは全然異つて居るに相違ない、先づ今世に於ては
 吾人は造物主の全善なることも全善なることも見ることは出来ない、又完全
 義と完全道理を曉らないものだ、之を以て無邊なる造物主に對して犯したる
 罪、爲したる悪、又其罪惡の如何に重いか、如何に酷く罰されべきものかと
 いふことを明かに知ることが出来ない、吾人は今世に於て只智が浅いといふ
 のみでなく、情まで拗けて居る、故に造物主を辱しめることの如何に怖い罪
 かといふことを左ほかに感じないのである、否却て造物主に對して謀反し不

(三十) 天國に在る靈魂が地獄の苦罰を視て其福樂を傷けざるや

(三十一) 肉体の感覚を離れて何を樂むや
 孝し不忠した罪人が義に由て罰されるのに同情を表して可哀相に思ふのであ
 るが、これは不道理な感情ではあるまいか、吾人は來世天國に往つたならば
 智が開け道理と義を完く曉り、惡の如何に不可かといふ其性質を明かに知り、
 情は正直に成つて決して罪人の苦罰に牽かされることなく、只管造物主の善
 なる美なる御徳に牽かされて居るであらふ、近くいへば天國に居る善人は其
 智其情其感とが造物主と一致して、幾んど同じやふに成るのである、即造物
 主は地獄の苦罰を視ても其無邊なる福樂は秋毫も傷けられない如く吾人もさ
 うなるのである。

(三) 或問、

吾人に福樂のあるのは肉体の感覚があるからだ、されば死後靈魂のみと成る
 とどう何うして福樂を感じ得られるか。

解答、

靈魂が肉体を離れて後は如何様に働くかといふことは解らない、前掲の第十
 五の解答にも書いた通り主命といふものは之を定義することの出来ないはど
 漠然たるものである、況して其生命の本原なる無形にして見ざる靈魂に至

つては猶更其性質を知ることの出来ないものである、既に其の性質を知らな
 いならば何を以て肉体を離れては働くことが出来ぬと云ひ得るか、問者は福
 樂は肉体の感覚を離れては無いといふが、現世に於てさへも感覚より出でな
 い快樂が少しはあるではないか、例へば完全なる美、完全なる善といふが如
 き高尚にして無邊的思想を起し、之を深く考へて心中に娛むといふが如き
 ことは決して感覚より出るものではない、肉体の感覚は下等にして有限であ
 る、故に下等にして有限なる快樂の外あることが出来ない、無邊といふ思想
 は感覚より出でないといふは疑ひない、シテ見ると靈魂が現世に於て肉体と
 全く結合したといふても、肉体と同一物になるほど離れられたものでない、換
 言は靈魂の能力は感覚より来る現象を感じるのみであるといふやふな狭い低
 い範圍に居るものでない、之を以て靈魂は肉体を離れても、働くこと感する
 こと樂むこと悲むことのないものとは決していはれないのである、實際にい
 へば靈魂が肉体を離れるといふことは不道理で其性質に反することである、

(三十二) 肉体の感覚を離れて何を樂むや

三十二 肉体の感覚を離れて何を樂むや

即ち終りなく肉体と結合するのが靈魂の本性である、それで死といふことは本性に反することだ、故に造物主が人間を造りなされた當時は死といふことは無つた、然るに其後人が背いたから死といふ一の罰を下されたのである、其他にも罰は種々あつたが取別一番可怖罰であつた、死といふことは人間を滅するものである、靈魂が肉体を離れば最早人間でない、死は實に人といふ性質を氓すもの、人といふ生命を奪ふの罰だ、何と怖しい罰ではないか、第一篇三十二の難目にも答へた通り、造物主の確定的目的といふものは必ず達せられる、それで造物主が始めに人間を造り給ふたときの確定的目的は不滅といふことであつた、故に死といふ罰を以て肉体と靈魂とが離れるといふことは際限ないことでなく或一定の時間中でなければならぬ、換言は終には靈魂と肉体とが再び結合して人間と成り、造物主の確定的目的は達せられる時が無ければならぬ、此故に死は世の終りまでにして世の終りに當ては一切人類の靈魂と肉体とは造物主の全能に因て再び結合し復活するといふは疑

(三)或問、

ひない、依て人が靈魂のみを以て福樂を受けるも苦罰を受けるも實は死の時から世の終りまで、即 永眠中のみのことである。

解答、

死だ人間が後に復活するといふ説が學問に合はぬといふのは間違だ、實驗學

に關係のない論だといふならば本當である、元來實驗學は眼前の現象を研究するもので將來の現象、數千年後のことを知る力はない、又吾人の耻すべきことは何であるかといふに、論理上に於て不道理な説に賛成すること、道徳上に於て惡を爲すこと、此二つを除くの外世に耻すべきことは一つもなからざれば論理道徳にさへ合ふことすら耻すべきことではなく却て譽れである、ソコで死者の復活といふことは論理上道徳上から見て如何であるか、第一完き義を以て考へれば善惡は缺點なく報ひられなければならぬといふことは疑ひない論理である所が現世に於て善惡を爲すものは靈と肉の合体した

三十三 人間が世の終りに復活するといふは學理に背く

三十二 人間が世の終りに復活するといふは學理に背く

る人間である、故に完全に報ひるには靈と肉とを以て居るときでなければならぬ、其責任が單獨に靈魂のみ或は肉体のみに歸する筈がない、依て若し死後の復活が無いならば善惡の報は靈魂のみが受けるのだから之は不完全な不具な義といはなければならぬ、斯る不完全な義を用ふることは造物主の性質に合はない、何せなれば造物主は無邊なる完全なる義で在らせられるから、故に曰く死後の復活は論理上疑ひない、
第二道徳上から見るに、法律に制裁がなければ死な法律で法律が無いと同じだが道徳も恰も之と同じで制裁がないならば道徳は在つて無きが如きものだ、又法律にして制裁が不完全であるならば如何に金科玉條を以て完備して居るといふても其法律は不完全たるを免れない、所が人から出る制裁は何うしても不完全であるから世の法律に完全なるものは無いといはれる、然るに造物主は無邊物である、其法律即道徳は完全にして又其制裁も缺點ないといふは疑ひない、然るに若し復活が無いならば道徳の制裁は靈魂のみにあつて

肉体に無いのだから不完全なるのみならず一半を律すのみの制裁である、これは造物主の性質に反することであり得べからざることである、故に曰く死後の復活は道徳上疑ひない、

斯く世の終りに當て一切人間が死より復活して靈魂と肉体とが結合して再び本の人間に歸り、善の報を受ける者は靈魂肉体共に天國に樂み、惡の報ひを受けるものは靈魂肉体共に地獄に苦むといふ説は全く論理にも道徳にも合ふから之を信するものは智慧が啓け眞理を曉り道徳が解るといふ徴だから譽れであつて、却て之を信しないのは智慧が蒙く論理を辨へず道徳を知らないといふ徴だから耻すべきことだ憐むべきものである。

(三)或問、善美なる造物主の在す宇宙間に地獄の如き人間を苦める所があらふとは思はれぬ。

解答、造物主の性質を知らぬから右様の疑ひを起すのである、造物主は美、善、憐の徳のみを具へ給ふものならば素より問者のいふ通りである、然しなが

三十三 善美なる造物主の在す宇宙間に地獄の在るといふは信するに足らず 百二十三

三十三 善美なる造物主の在す宇宙間に地獄の在るといふは倍するに足らず 百二十四

ら造物主は無邊物である、美、善、憐の三徳を具へ給ふのみでない、總ての徳を完全に具へていらせられる、故に完全なる智も完全なる義もある、換言ば完全なる智、完全なる義は秩序に同じだ、全智だから善悪の差別を全く曉る、全義だから善悪に全く報ひる、人間でさへも道理と義の幾分を知つて居るから不完全ながらも善悪を辨へ之に報ひないものは無い、況んや造物主に於てれやだ、然るに生涯悪を爲して造物主に背く不忠不孝な人間、思言、行を以て何十年間造物主を辱しめたものを罰せぬといふやふも不道理なことか何うして造物主に出来やふか、さやふな不秩序なことが何であるべき筈だか、而て此不道理不秩序なることの無いやふにするには是非とも來世の賞罰の必要がある、即天國も地獄も是非なければならぬ、然るに若し悪人の爲のみに地獄を除くならば彼等は何處に往くべきか、天國にでも往かなければ往くべき所はない、造物主に背いた報ひとして天國の福樂を受けるといふ、ソナ顛倒なことが世にあらふか、要するに造物主の在す宇宙間に地獄の如き

苦罰を興へる場所のあるは唯義の爲である、美善なる造物主は義を具へ給ふ、總ての徳が無邊なる如く義も亦た無邊である、故に美徳善徳の爲に義を失ふことは出来ぬ、それで地獄があるのである、さうして又造物主の總ての徳が働く時と處とは其お定めなされた規則に従つて各違ふ、聖書に記してある通り、現世は試験場にして造物主の愛と憐の顯はれる時である、故に人が惡を爲しても本心に悔ひ悔めれば其憐を以て宥し給ふのである、けれども來世は報ひの處である、造物主の無邊なる義の働く時である、故に現世に於ての過ち爲した惡きとは最早改めることは出来ない、換言ば現世は來世に行く道にして來世は現世の如何に因て確定されるのである、聖書にも「爾等眼を來世に注ぎつゝ現世に處るべし」と記してある。

(三)或問、無限の憐ある造物主が、地獄に無限の苦罰を興へるといふは自家撞着ではあるまいか。

解答、これは前の難問と云ひ方が違ふのみで其意は同じである、故に同じことを以

(三十五) 限りある罪を罰するに限り無き者を以てするは過酷なり

て答へねばならぬ、造物主は無限量だから其具へ給ふ徳は單憐み斗りでない、智も力も義も皆無限に具へ給ふ、憐みが無限だから世に生さる間如何なる大罪を犯しても直ちに罰し給はず死に至るまで恕して改心を待ち給ひ、若し本心から悔悟すれば欣んで其罪を赦し給ふのである、又無邊なる義であらせられるから現世に於て何うしても改心せぬやふな惡に固まつた人間は地獄に於て罰し給ふのである、改心もせず犯した罪を詫びない人を赦したり愛したり賞を與へたりすることを却てこれ自家撞着である、否之よりも愚な話はあるまいではないか。

(三)或問、

人間の犯す罪は皆な限りあることだ、然るに死後地獄の罰には限りが無いといふ、これは餘り過酷るといはねばならぬ。

解答、

人間の犯す罪は皆な限りあるものだといふは眞實だらふか、之を明かにするには罪といふことを審かに研究しなければならぬ、先づ罪とは何であるか、命するの權利あるものに背くことである、凡そ如何なることでも罪と構成に

(三十五) 限りある罪を罰するに限り無き者を以てするは過酷なり

は二つの要素が無ければならぬ、即背くものと背かれる者である、故に罪其物の性質を究めるには此二つのものを以て考へなければならぬ、ソコで背くものは何であるか、命せられる義務ある人間である、背かれるものは何であるか命するの權利ある造物主である、さうして背いた人間の方から見るときは有限物だから其犯した罪は有限である、有限なる人間に決して無邊な働さを以て罪を犯すことは出来ないといふは無論のことだ、次ぎに背かれる者即造物主の方から見たらば如何、是亦た有限の罪と云はれやふか、造物主は無限量である無限量に對して犯した罪は無限量らしい罪とは思はれないか、罪は對するものゝ位の高いほどそれ程重いといふことは道理ではなからふか、例へば平民に無禮するのと國王に無禮するのと其不敬の罪に輕重がないだらふか、決してさうでない、平民に無禮したとて別に法律に問はれないが、國王に無禮したならば不敬罪として重く刑せらるゝといふは各國の法律である、國王に對してさへも左様に重い、況や無邊なる造物主に對して背くに於

(三十五) 限りある罪を罰するに限り無き苦を以てするは過酷なり

てれやである、其罪は造物主の無邊なる性質に關係がある、即其罪は無邊らしいものだ、されば吾人は現世に於て罪其もの、重さは到底も量ることば出来ないものである、吾人が道理に因て解つたことは只無限らしい罪は無限らしい報ひを受けねばならぬといふことだけである、所が地獄は始があつて給うが無い、始があるから無限でない、故に其終りの無いといふことは無限らしいことだと思はれる、此無限らしい罰は恰度無限らしい罪に適當して居るではないか、以上論ずる所は幾分か意味が深い、故に尙解易い理由を一つ陳べやふ、何故來世の賞罰に終があつてはならぬかといふに、天國は神を深く愛し、又神に深く愛せられるといふ福樂、地獄は神を太く嫌ひ、又神に酷く嫌はれるといふ苦罰のある所だ、然るに神を嫌ふ心を顛覆して愛する心を起すことが出来やふかといふに、第八の解答に陳べた通り、吾人が不完全なる自由即善惡を擇むの能力を持つのは今世に生存して居る間のみであつて、死ぬと同時に此

(三十五) 限りある罪を罰するに限り無き苦を以てするは過酷なり

自由を失ひ世に在る間の行に従て善或は惡に固つて仕舞のである、善人が神を愛する心を廢めて秋毫でも嫌ふといふ心を起すことは出来ない、又惡人が神を嫌ふ心を廢めて微少でも愛する心に成るといふことは出来ない、地獄に於ては善惡を擇むの自由を失ふから詫ることも悔ゆることも倏むることも出来ないのである、一言を以て云へば神の赦宥を受けたいといふ心までも起すことが出来ないから赦宥を受ける道が盡きて終りなく惡に固まり終りなく神に勘當されるのである、其怖しいことを聖書に例へてある『死せる者は山中に倒れたる枯木の如し』と、即ち枯木が倒れて何十年何百年でも依然として其儘に在るが如く善に倒れた靈魂は善の方に永遠に居り、惡に倒れた靈魂は惡の方に無終に置かれるといふのである、是は道理ではないか、不權衡とは思はれぬでないか、然し問者は又いふであらふ、不權衡でないとしても過酷ぬとしても、可哀相であると、吾人は決して可哀相と思はぬ、彼の風癩白痴の徒の自ら巳の手足を焼くが如きことを見ては之を憐むの情を起さざるを

(三十五) 限りある罪を罰するに限り無き苦を以てするは過酷なり 百三十

得ない、然れども風潮にも白痴にもわらざる健全な智慧を有ちながら知りつゝ、悪しき目的を以て己れの手足を焼くが如きは寧ろ悪むべきものである、人が自ら招いた罰生涯態々神を嫌ひ、態々神の道理なる報ひを受けるやうに働いたものが何で可哀相だらふか、總て何事を論ずるにも兎角感情を混せるから解らぬのである、只智慧に因り道理を以て論じなければならぬ、心の邪曲な人間は只感情一方を以て老へるから可哀相だといふのであるが、論理に因りて深く考へれば決して可哀相に思ふべきことでない、彼等は畢竟自ら他くまで其報を望むので、實は彼等悪人の目的が達せられたのだといはねばならぬ。

解 疑 第 二 篇 終

明治三十五年五月廿六日印刷
明治三十五年五月三十日發行

著 者

佛 國

ドルワルド、レゼー

發行人

林 壽 太 郎

甲府市太田町第九十五番戸

印刷人

村 岡 平 吉

横濱市太田町五丁目八十七番地

印刷所

福音印刷合資會社

横濱市山下町八十一番地

發行所

三 才 社

東京市神田區錦町一丁目十番地

- ◎文明之華
- ◎婦人の赤心
- ◎理想之家庭
- ◎實驗界と迷信界
- ◎倫理叢書 文明之武士
- ◎同賢 明
- ◎同正 義
- ◎同武 勇

代價金貳拾貳錢
 郵税金四拾
 代價金四拾
 郵税金六拾
 代價金六拾
 郵税金八拾
 同 上
 代價金八拾
 郵税金十
 代價金五
 郵税金二
 代價金四
 郵税金貳

販賣所
 三才社

- ◎平民死
 - ◎一年有半の哲學と萬世不易の哲學
 - ◎四歐文ルソーとその文學
 - ◎西歐文士の學生訓
- 代價金四錢五厘
 郵税金三
 代價金六
 郵税金二
 代價金八
 郵税金三
 代價金八
 郵税金二

◎神學地獄
 ◎斷片
 ◎公教救監
 ◎羅旬哲人之人生觀
 發交前田長太郎著

318
52

